

# おしゃニの盛り合わせ

ドレモネード

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

pixivに投稿したものを、こちらに載せていければいいかなと。

## 目次

はばたくための翼が見えない	1
甘くて白い、そんな日に	5
唐突だけれどアンダンテ（前編）	19
唐突だけれどアンダンテ（後編）	26
コラッ！ 摩美々ツツ!! すこだツツツ!!!	32
ストロベリームーンが見ている	41
雨の日はすこしだけ踵を上げて	46
まみみのみみに触れたなら	60
誕生日なのに縛られてしまった黛冬優子を祝う会	63

はばたくための翼が見えない

なんの個性もない私だけれど、トップアイドルになりたいという漠然とした夢だけは持っていた。

テレビの中で笑顔を振りまくアイドルたちは誰も彼も魅力的で、私と同じように日々オーディションに向けて汗水を垂らしレッスンに励むアイドルの卵たちでさえ、眼を見張るような強みやチャームポイントがあった。

ただ、私にはなにもなかった。

子供の頃より、周りの大人たちだけでなくいろんな人から容姿を褒められることはあった。だから、容姿は人並みより優れているはずだ。

でも、それでは意味がない。

私がいるこの世界では、平均以上のルックスなんてあって当然。なければ書類審査の時点で切り捨てられている。トップアイドルへの階段を駆け上がるには、それ以外の何かが必要なんだ。ボーカルも、ダンスも、平均以上のルックスを更に磨き上げる技術も、何もかもを備えなければトップアイドルどころか、第一線級で活躍することすら難しい。ごくまれに、それらが身についていないにも関わらず、運や珍しい特技、並外れた愛嬌などが味方して、あれよあれよと出世街道を突っ走っていく人もいるらしいけれど、私のもとにそんな奇跡は訪れないはずだ。

したがって、私に残された道はただひとつ。

レッスンのみ。

トレーナーの厳しい目と声に、初めは音を上げそうになった。いや、実際に人の目がないところでは音を上げていた。弱音ばかりを吐いていた。寝る前には、何度も何度も、なぜわたしはアイドルを目指しているのだろうかと自問自答を繰り返していた。もう、やめてしまおうかとさえ、思ったことがあった。

でも、やめられなかった。

やめなかった。

——あなたが、いたから。

目も当てられないような醜態を、よりもよってオーディション会場で晒してしまった時には、さすがにもう諦めようと思った。なぜこんなに辛い思いをしてまで、笑顔を浮かべて踊って歌わなければならぬのか。キツイ、つらいと、苦しみながらみっともなくパフォーマンスを続けるアイドルを見て、いったい誰が喜ぶというのだろうか。観客は、私たちアイドルのバックボーンなんて求めていない。彼らは、ステージ上で輝く私を求めている。私だってそう。私も、ステージ上で燦然と輝く私を求めている。求めているけれど、そんな私を想像できない。私にはできない。だって、あんなに練習したのに、こんな無様な姿を晒してしまうんだ。きつと私はほんの少し顔がいいだけで、アイドルには向いていなかったんだ。取り返しがつかなくなる前にアイドルの道は諦めて、普通の高校生に戻って普通に勉学に励もう。

ステージから控え室までの通路で、そう結論づけた。

帰ってきた私に向けて、あなたは言った。

「失敗なんて、誰にでもある。大事なのはその失敗を、どうやって成功につなげるかだ。次のオーディションだってあるんだ。可能性が消えたわけじゃない。努力を続けていけばいつかは——」

誰にでも思い浮かぶような、月並みな言葉だった。

ただ、その顔を見ると、その声を聞くと、とても非難する気にはなれなかった。

意気消沈する私に言葉を投げかけ続けるあなたのその顔は、その声は、とても必死で、とても悔しそうで、今にも泣き出してしまいそうなほどにゆがんでいて、でも、とにかくあなたの想いが伝わってきて。

「——叶うから。絶対に、灯織の夢は叶うから。だって、あんなに練習してるじゃないか。俺が保証する。他の誰よりも、灯織が何倍も何億倍も頑張ってる。俺は知ってるから。灯織がアイドルをやめたくなくなるほどつらい思いをしていることも、それなのに歯あ食いしばって堪えていることも。いつもいつも灯織は自分を卑下しているけど、とんでも

ない」

なぜだろう。私は、泣いていた。

「灯織は、誰よりもかわいしい誰よりも美人だし誰よりもターンが綺麗だしその時に揺れる黒髪がとんでもなく美しいし料理も上手だし声も綺麗だしふとしたときに見せる柔らかい表情なんて絶世の美女って感じだし」

嘘のような世辞を言いつのつて息も絶え絶えになりつつも、あなたは最後にこう言って笑った。

「俺にとつてのトップアイドルが、実際にトップアイドルになれないなんておかしいだろ？」

——あなたの言動の方がおかしいですよ。

そう言おうとしたけれど、声にすることはできなかつた。

経験したことのない量の感情が目からあふれ出してしまつて、それをぬぐうのに精一杯で、意味をともなつた言葉なんて口から出てこなくて、とにかくあなたの声と顔ばかりが耳と脳内に焼き付いて離れなくて——

私は心の中で、やめられないなあ……とだけつぶやいていた。

○

眩しい、と感じた。

『優勝は、エントリーナンバー283、風野灯織さんですッ！』

暗闇の中を直進するたくさんの光線が私を撃ち抜いていた。

地鳴りのような歓声が沸き起こる。

まさか、と思いつつ舞台の袖に目を向ければ、あなたが満面の笑みで渾身のガッツポーズを決めていた。

理解した。

私は今、たしかに輝いている。

いっぱいのスポットライトを浴びて、いっぱいの拍手を浴びて、いっぱいの注目を浴びて、私は今、ようやくアイドルになることができたんだ。

余韻に浸る間も無く、司会の女性がコメントを求めて、マイクを片手に近づいてきた。

……さて、何と言え、アイドルらしいと感じてもらえるのだろうか。舞台の袖を見れば、あなたは笑いながら涙を流していた。

私は、気を抜けば泣いて歪んでしまいそうな表情を引き締めて、あなたが魅力的だと言ってくれた笑顔を作ろうと、口角を思い切り上げてみる。

『まず始めに、簡単な自己紹介をお願いします』

これから何度もお世話になるであろうマイクに向かって、私はアイドルとしての第一声を放った。

「風野灯織です！ 夢は、トップアイドルになることです！ これから……末永く！ よろしくお願いします!!？」

耳をつんざくような大歓声が、私の門出を迎えてくれた。

○

まだまだ駆け出しで至らぬところの多い私ですが、トップアイドルというアイドル界の頂きに登りつめるまで、できるだけそばで見てくださいね、プロデューサー。

(おしま)

甘くて白い、そんな日に

「真乃、バレンタインのドーナツありがとうございます。これ、お返しなんだが」「ほわっ……ありがとうございます、プロデューサーさん。——わあっ、鳩さんですね！」

「ああ、お菓子作りは不慣れだが見よう見まねでクッキーを作ってみたんだ。ラッピングも真乃にもらったものに比べて簡素だけど」

「いえ、嬉しいです。それにこの鳩さん、とつてもかわいくて、食べるのがもったいなくなってきたちゃいました」

「あー……そっか、鳩の形だと真乃には食べにくいのかもな」

「ほわわ……そういうわけじゃなくて、えっと、がんばって食べます！」

「ふつうに食べてね」

「むんっ」

☆

「灯織、先月も伝えたけど、チョコ美味しかったよ。これお返しのクッキーな」

「あ、ありがとうございます。クッキー、ですか」

「どうかしたか？」

「えっと……この形は、なにを模したものでしょうか。なんだか不思議な形をしていて、気になってしまって……すみません、せつかくもらっておいて口を挟むなんて」

「餃子だ」

「えっ？」

「餃子の形をしたクッキーだ」

「……ぎよーぎ、ですか」

「きれいか？ 餃子は」

「いえ、決してそんなことは」



「まあ、味は普通のクッキーなんだがな。市販品には劣ると思うが」  
「……まさか、プロデューサーの手作りなんですか」  
「ああ、生まれて初めてお菓子を作ったけど、難しいもんだな。灯織のクオリティには遠く及ばなかったよ」  
「そんなことはないと思いますけど……ちなみに、真乃やめぐるにもこの餃子のクッキーを渡したんですか？」  
「いや、灯織だけだよ」  
「私だけ？」  
「ああ、灯織だけの特別仕様だ」  
「私だけの、特別……ふふっ」  
「(よし、楽しく話せたな)」

☆

「おっはよー、プロデューサー！」  
「おう、おはようめぐる。これバレンタインのお返しな」  
「えー!!? ありがとうっ！ プロデューサー、お菓子つくれたんだね。なんだかちよつと意外かも」  
「いや、まともに作ったのは今回が初めてだな」  
「へーっ！ じゃあすつごくレアだね。大事に食べないと」  
「まあせっかくみんなから気持ちのこもったプレゼントをもらったんだから、こちらとしてもきちんと言わないと不義理だよな」  
「不義理……? プロデューサーは、義理だけで私たちにお返ししてくれてるの?」  
「そんなことはないぞ。もちろん本気で、感謝とか、ありがとうとか、これからもよろしくって伝えてるつもりだぞ」  
「だよね！ ……うん、そうだよね。うん。うん！ すつごい、いっばいの気持ち伝わってきてるよ、プロデューサー！」  
「ああ……なんか、もう、ありがとうな、めぐる……」  
「なんでプロデューサーが今、お礼言っちゃうの?」

+

「どうもさつきからチラチラこつちを気にしている長崎娘がいるんだけど、摩美々、なんか良いイタズラグッズない?」

「ちつ、チラチラなんてうち見とらんもん!」

「ああそうか。チラチラじゃなくてがつつりだったな」

「もう!。うち、プロデューサーのことなんてゼーんぜん見とらんとに、なんでそがんこと言われんばいかんとよ。怒ると通り越して呆れてしまうばい」

「そんな恋鐘にはバレンタインのお返しをプレゼント」

「えっ!?。ありがとう〜!。これ、もしかしてプロデューサーの手作りね!?。すごか〜!!?。へえ〜……プロデューサーの手作り……もう我慢できんばい!!?。ねえプロデューサー、さっそく食べてみてもよか!?。よかよね!??。」

「あ、ああ……」

「おいしか〜!!?。うちの料理の腕とよか勝負ばい!」

「もう食つとる……」

+

「おはよーございま〜す」

「おー摩美々、ちよいこつちぎて」

「どうかしたんですかー?」

「はいこれお返し」

「……おかえし?」

「バレンタインの」

「あ〜……」

「ちなみに俺の手作りだからな!」

「ええ……」

「なんでちよつと引いてんだよ。言つとくけど、俺が今回手作りに挑戦したの、摩美々の影響だからな」

「……言ってる意味がよくわかんないですケド」

「だって普段料理しなさそうな摩美々が、慣れないなりにお菓子作ってくれてそれを俺にプレゼントしてくれたわけだろ？」

「お菓子って言うにはアレって——」

「不恰好だし驚くほど甘かったな。でもとても嬉しかったから。俺の勝手な妄想に過ぎないけどな、摩美々が悪戦苦闘しながら作ってくれてるところ想像したら更に輪をかけて嬉しくてな……」

「……………」

「だから俺も得意ではないが挑戦してみたわけなんだよ。気は進まないかもしれないが、受け取ってもらえると……ってあれ、摩美々どこ行った？ ……まあ、クツキーは消えてるから持つていつてくれたんだろうな」

†

「おはよう」

「おうおう満を持って本日の主役の登場ですなあ」

「どうしたんだいプロデューサー、どうも様子がおかしいけれど」

「いやいやちよつとな。おモテになる咲耶のことだし、きつと今日みたいな日は大変なんだろうなと少し僻みを交えてからかってみただけだ」

「大変だなんてとんでもない。たくさんの女の子からの好意を形として受け取れるんだ。嬉しい限りだよ」

「ふーん……じゃあ、俺からの好意も同じように受け取ってもらえるのか？」

「なんだって？」

「ど、どうしたんだ急にそんな真面目な顔をして」

「いや……つい、ね。アナタからの想いを、私が受け取らないわけじゃないか」

「まあ、それもそうか。咲耶は誰にでもやさしく対応するし、断るわけがないというか」

「だから、それは違うよ」

「えっ？」

「私にとって、アナタは特別なんだ」

「ぼっ」

「だから、アナタからの贈り物は一層に嬉しいものなんだよ」

「こら咲耶アイドルがあんまり滅多なこというんじゃないよこら」

「フフ……!! あなたも、そんな顔をするんだね」

「コラッ」

!!!!!!!

†

「Pたんおはよく、あっこれなに？ お菓子？」

「ん、ああ、クッキーだ。ホワイトデーの……つまりはバレンタインのお返しな。ありがとう、結華」

「えっ？ いやいや、なんか悪いなあ。三峰が渡したコンビニチョコが、手作りクッキーに化けちゃうなんて」

「そんなことないぞ。結華のチョコはいろんな味があつて楽しめたし」

「でもさー、やっぱり他の子と比べると、ちよつとねーって感じじゃない？」

「うーん、ただ間違いなく言えるのは、一番長いあいだ食べてたのは結華のチョコだったな」

「それってただ個数が多かっただけじゃない？」

「というわけで、俺も結華のぶんを一番多く包んだからな！ 手作りだから日持ちはしないし味の保証もできないが」

「ええ……それ、言っちゃおう？ でも、ま、ありがとプロデューサー」

「……来年のバレンタイン、期待しててね？」

†

「おっ、おはよう霧子」

「おはようございます……」

「どうした？　なんか聞きたそうな顔してるけど」

「あの……さつき摩美々ちゃんと廊下ですれ違ったんですけど、様子がどこかいつもと違うように見えて……」

「ここでもなにかあったのかも？　って？」

「はい……摩美々ちゃんがちょうどこの部屋を出るところも見たので……」

「あー、もしかしたら」

「……？」

「ついさつきバレンタインのお礼も兼ねてクッキー渡したんだけどさ、そのとき俺がなんか気にさわることを言ってしまったのかもな」

「……えっと」

「ああ、そんな不安そうにしないでいいから。大丈夫、たいしたことは言っていないはずなんだよ。ほとんどお礼言っただけだし。嬉しかったよーって」

「……それって」

「ん、なにか分かったのか？」

「たぶん、摩美々ちゃん、照れてるのかも……」

「照れてる？」

「はい。だとしたら、すれ違った時のあの顔、あの雰囲気も……うん、きつとそのはずだから……心配はいらないはず、です」

「そっか……にしてもすごいな霧子」

「えっ？」

「摩美々の顔を見ただけで、なにを考えていたのか読み取れるなんて」「そんなことは……だって、その、プロデューサーさんも同じこと、できてますよっ……」

「……えっ？」

「きょう、わたしがなにか聞きたそうにしたり不安になったとき、先にプロデューサーさんが気づいてくれてたから……」

「それは、まあ……なんとなくて……」

「プロデューサーさん、問題です」  
「え？ あ、うん」  
「いま、わたしはなにを考えているでしょう……」  
「んー、『わたしも、クッキーがほしい』」  
「……………」  
「……………」  
「……正解です」  
「やったあ」



「すごいです〜！ これ、プロデューサーさんが作ったんですか!?!」  
「そうだぞー。しかもひとりで。どうだ、すごいだろ?」  
「ひとりで!?!? あたし、ちよこ先輩に手伝ってもらってなんとか形にできたのに、プロデューサーさんはひとりで……………すごいです!」  
「そうだろそうだろ〜。ジャスティスレッドとどっちがすごい?」  
「ジャスティスレッドです!!?」  
「……………だよなあ」  
「あつ! このクッキー、もしかして……………マメ丸ですか?」  
「おお、よくわかったな。ちよつと形を工夫したり絵を描いたりして遊んでみたんだよ」  
「マメ丸クッキー……………! おいしいです!!?」  
「ジャスティスブルーとどっちがすごい?」  
「ジャスティスブルーです!!?」  
「だよなあ」



「この甘い匂いは……………プロデューサーさん、いま、たくさんのお菓子を  
持ってますね!?!?」  
「さすが智代子、鼻が効くな。警察犬になれるぞ」

「ええっ!?? 私、人間ですよ!??」

「知ってる。いま渡すからな、バレンタインのお返し……はい、こつちが智代子のぶんな」

「やったあ！ ありがとうございます！ さっそくいただきます！ さっそくいただきます！」

「ああ、構わないよ」

「いったただきまうす！ ……って、あれ？ このクッキー、ちよつと欠けてません？ それにこの欠け方は……」

「ああ、ごめんごめん。ちよつとつまみ食いしたんだよな」

「やっぱり菌型だこれ!?? ……まさか、他のクッキーにも」

「いや、たぶんそれだけだな」

「他の子のぶんにつまみ食いをしちやつたりとか……」

「それもないな」

「ちなみにそつちの袋は」

「それは、凜世のぶんだ」

「確認してみても？」

「いいぞ」

「たしかに……菌型が見当たらない………なんで、私だけ……」

「そりやあ、お返しのためだ」

「……え？」

「バレンタイン当日、俺にプレゼントするチョコをつまみ食いしたのは、どこの誰だったかなー？」

「あ……ああ……」

「んー？」

「……私、です」

「っていう冗談もここまでにして。さすがに俺の食べかけなんて智代子に食べさせるわけにわいかなからな。これは俺が食べるぞ」

「えっ？」

「……え？」

「……えつと」

「まさか、食べるつもりだったのか」

「……はい」

「智代子……どんだけ俺と間接キスしたかったんだ……」

「ちつちがつっ！ 違います！ 食い意地が張ってるだけですよ！」  
「それ自分で言うか？」



「樹里、これなーんだ」

「ああ？ ……クッキー」

「正解だけど、不正解。解答は、ホワイトデーのプレゼントでした」

「はあ？ なんでわざわざそんなもん用意してんだよ。いいよ別に、アタシだってそんな大したもん渡したわけじゃないし……」

「いや、ぜったい受け取ってもらうからな」

「なんだよ……いやに気合が入ってんな……」

「というわけで、はいこれ」

「……あながと。……ん？ なんだこれ、字？ 『り』とか『い』とか、ひらがながクッキー生地に書かれてんだけど」

「さて、問題です」

「またかよ」

「この袋の中には、十個のクッキーが入っていますが」  
「けっこう多いな」

「その全てにひらがなの文字が写されています。それらを並べて、意味の通る文章にしてください。はい、始め！」

「ええ……なんだそれ。まあ貰ったからにはやるけどよ……」

「うわっ、なんと西城選手、取り出した時点ですでに文章が完成しているというミラクル！ ものすごいミラクルです！」

「マジか。えっと、なにに……？ 『じ ゆ り ち ゃ ん だ い す ……』なんだよこれ、ふっぎけんよプロデューサー……」

「まじごんめー」

「こら待て逃げんじゃねえ!!!」





「プロデューサーさま」

「ハア……ハアツ……」

「プロデューサーさま」

「ん、凜世か。すまん、ちよつと年甲斐もなく追いかけてっこしててな。

強敵だったんだ。ハア……ハア……」

「はい……見ておりました」

「そうか。じゃあ、これ。俺からのほんの気持ちな」

「ありがとうございます……この身に余る幸せとは、このような気持ちのことを言うのでしうか……」

「そんな大げさな」

「いえ、決して大げさでは……」

「……どうした、なにか気になることでも」

「……印字が」

「字？ ああ、樹里のやつか」

「こちらのお菓子には、印字が、なされていらないのですね……」

「ああ……えつと、あれは……その……」

「……」

「……」

「……プロデューサーさま」

「凜世のことも、もちろんだいすきだよ」

「プロデューサーさま……！ 凜世も、お慕いしております……」

「(よし、楽しく話せたな)」



「夏葉、バレンタインはありがとな。これ、ホワイトデーのお返しなんだが、受け取ってくれるか？」

「もちろんよ！」

「よかった」

「もしかして、私が受け取らないとでも思ったの?」

「いやあ、もし夏葉が身体を絞るために糖質制限とかしてたら迷惑かなあと」

「あまり私を見くびらないでもらえるかしら。私は普段からバランスの良い栄養摂取を心がけているから、わざわざダイエツトや食事制限だったり、極端な体質改善が必要な状況に陥ることがまずないの」

「すまんすまん、軽率だった」

「まあ、私だって甘いものは別に嫌いじゃないから、食べ過ぎにはいつも気をつけているけど……あれ? このクツキー、不思議な形をしているわね」

「ああ、それな。ステンドグラスをイメージして作ったんだよ」

「へえ……きれいな」

「ちなみにこれ、どうやって作ったと思う?」

「それは……中心の部分が空洞だから、穴を開けて一度焼き上げた後に、そこへキラキラしたなにか……飴、かしら。それを流し込んで固めているのでしょうか? すごく手間がかかっているのね」

「それがな……実は、初心者向けの便利グッズひとつで、これを作れたんだよな」

「なんですって!?? すごいじゃない!」

「だろ?」

「ええ、すごいわ……」

「ジャステイスレッドとどっちがすごい?」

「それはもちろん、その便利グッズよ」

「……俺は?」

「何か言ったかしらプロデューサー」

「いや、こういうグッズを開発する人たちってすごい発想してるなあって」

「まったくその通りね!」

「甘奈、レツスンおつかれさま」

「おつかれさま☆」

「あれ、甜花はいま一緒じゃないのか」

「うん、甜花ちゃんはずっとトレーナーさんに捕まっちゃってね」

「そうか。……それなら、まあ、別々でもいいか」

「なにか甘奈に用事？」

「ああ、ホワイトデーのプレゼント渡そうと思ってな」

「そっか！ そういえばきょうはホワイトデーだったね。学校でもみんなお菓子のやりとりしてたし」

「というわけで、はいこれ」

「わあ、ありがとう！ かわいいね、ハート形なんだ！」

「ああ。アルストロメリアのみんなにはその形で作ったから、甜花にも同じものを渡すつもりだ」

「やったあ、甜花ちゃんとおそろい☆」

「喜んでもらったようで何よりだよ」

「ハート形だから、一口で食べないとね」

「へえ、そういう決まりかジンクスが、甘奈のなかであるのか？」

「うーん、だって、ハートが二つに割れちゃうと、なんか不吉って感じしない？」

「なるほどなあ、言ってることはわかるけど、俺はあんまり気にしないかもな」

「甘奈は気にしちゃうなあ……プロデューサーさんからのプレゼントなら、なおさら」

「へえ、そういうものなのか」

「あーっ、いま、よくわからないからって適当にながしたでしょー」  
「うっ」

「べつにいいけどねー☆ とにかく、女の子にはいろいろあるってこと、プロデューサーさんには覚えていてほしいな」

「ああ……ちなみに、ハートがわれてしまって不吉っての、甜花は気にすると思うか？」

「んー、それはないと思うなあ。甜花ちゃん、繊細だけど、そういうと

「ころは意外とどっしりしてるし」

♡

「おつかれさま。トレーナーさんに、こつてり絞られたみたいだな」

「あ、プロデューサーさん……おつかれさま、です……」

「そんな頑張った甜花に、ご褒美ってわけじゃないけどプレゼントがあるぞ」

「プレゼント……?」

「はい、バレンタインのお返しだ。ちなみに俺の手作りクッキーだぞ」  
「すごい……プロデューサーさん、お菓子づくり上手なんだ……」

「え? いや、それでもないぞ」

「……でも、甜花よりはぜんぜん上手……」

「ああ……そうは言っても、甜花からもらったチョコ、しっかり美味しかったよ」

「にへへ……なーちゃんと一緒に作ったから……甜花がへたつぴでも、なんとかあったのかも……」

「うれしかったよ、甜花。ありがとうね」

「……にへへ、甜花も、うれしい」

「それはそうと、甜花はそのクッキーの形を見て、なんとも思わないか?」

「……えっと、ハートの形をしてて、……かわいい」

「それだけか?」

「……うん。あとね」

「ん?」

「甜花、もつとがんばろって思った」

「そっか」

♡

「千雪、受け取ってくれるか。ささやかながら、バレンタインのお返し

「なんだが」

「まあ！ありがとうございますプロデューサーさん。こんなにいっぱいのクツキー、それもみんなハートの形でかわいらしくて、私……うれしい限りです」

「俺の（日頃の感謝の）気持ちをたくさん詰め込んだつもりだ」

「えっ、プロデューサーさんの気持ちを、このハートの形に？ それって……」

「千雪？ どうかしたか？」

「えっ、いえ、その……気持ちを込めたって……本気ですか？」

「なにを言ってるんだ。当たり前だろう。本気も本気、誠心誠意、千雪（を含めたアルストロメリア）のことを思っで生地をこねて焼き上げたんだ。だから喜んでもらえると、俺もうれしいな」

「そっ、そうなんですネ……えっと、その……お気持ちはとても嬉しいですし、でも、やっぱり私はアイドルですし、その、えっと……」

「ん？ なにを言ってるんだ千雪」

「だから、その……すこし、考えさせてください。できるだけ前向きな答えを用意するつもりですけど、やっぱりあまりにも急で、心の準備が……」

「よくわからないけど、喜んでもらえたようだなによりだよ。やっぱりハート形にして正解だったな。甘奈と甜花もとても喜んでくれたし」

「……えっ？」

「ん？」

（おしまい）

## 唐突だけれどアンダンテ（前編）

地獄のようで天国のようでもあったW・I・N・G。決勝を終えて、プロデューサーさんあいつから三日間の休みをもらったので、専門学校からの帰りにアキバに足を運んでみた。

それにしても懐かしいわね、この空気。萌え萌えしたポスターやら告知が、我が物顔で跋扈するのが許されるこの地帯。時間に追われる日常空間から、趣味のためだけに時間を使える空間に解き放たれるこの心地よさ。とてつもなく、懐かしく感じる。なにこれ、哀愁？ アキバは、ふゆにとつての故郷だったの？

W・I・N・G。前はパフォーマンズの精度を高めるためにオタ活に精を出せず、アニメもグッズも新刊にも満足に触れることができなかったから、当然アキバに赴くこともなかった。その期間はせいぜい一、二ヶ月程度だったとはいえ、されど一、二ヶ月。それだけの時間が過ぎれば、録画していたアニメはどんどん溜まるし、一番くじやらなにやらのグッズは綺麗に売り切れ転売されてるし、新刊はすでに新刊ではなく既刊になってしまっている。アイドルになる前は、少なくとも週に一度はアキバまで行かずともそこらの書店やショップくらい覗けていたのに……。

はー、新進気鋭のアイドルって辛いわねー。つらい。つらいわー。だいたい、第一線級で活躍している先輩方に休みなんてあるワケ？息抜きや趣味に割ける時間なんてなさそう。それでよくあんなキラキラとかわいらしい笑顔を維持できるものね。尊敬と同時に、畏怖をおぼえてしまう。

でも、ふゆは、そこを目指してるわけなんだよね……。

まあ、意外と気が利くあいつのことだし、もしもふゆや他の283所属アイドルが多忙を極めたって、少しでも余裕のあるスケジューリングをしてくれる気がしなくはないけど。それでかえってあいつ自身にしわ寄せがいつて、残業やら徹夜をされてもらっても困るわけだけど。そんなあいつは今日、ふゆと同じくオフのはずだけど。だから

せつかくふゆがアキバ観光に誘ってあげたのに、「予定というか先約があるから、ごめん」って断りやがったから、ふゆの知らないどこかで羽根を伸ばしやがってるはずだけど！ あいつが今後の仕事のために、ふゆのことをもつと知りたいとか言うから誘ったのに！ だいたいそう言うくらいならあいつの方から誘うべきなのに！ そんな不満を飲みくだしてこっちから誘ってあげたのに！ なんなの？ 予定が先約がくって……その先約と担当アイドル、どっちが大事なのって話よ。結果としてふゆを切り捨てたんだから、よっぽどその先約とやらが大事なんでしょうけどね！

「はあ」

なんか腹立ってきたわね。

ガシャポン回そ。

うだうだ考えながら歩いてたら丁度、オタ向けショップの軒先だったの、ためらいなく入店してガシャガシャコーナーへ。視界に飛び込んでくるたくさんさんの筐体とおびただしい数のカプセルに、毎度圧倒されちゃうんだけど、ほんと、なんでこんなに多岐にわたる種類のガシャガシャがあるのかしらね。ふゆみたいに回す人がいるからなんだけど。

ざつと眺めてピンときたのは、リアルなつくりが売りの漬物キーホルダーガシャ。狙いは梅干しで、次点はキュウリの浅漬けね。単純に、色がきれいで見栄えがいいから。

おさいふから取り出した百円硬貨を二枚差し入れて、レバーをざりざりと回す。

がたん、と音を立てて出てきた赤いカプセルを手にしたところで、すでに嫌な予感。かぱこつと開けて中身を確認すると、

「い、いらないわよこんなの……」

つい本音が出てしまった。マスクをしているうえに小声だったから、周りの人に今の可愛げのない低い声が聞こえていたとは思わなかったけど、つついキョロキョロしてしまう。幸運にも人の通りはなかったものの、つくづくかなしい性だ。

でも本当にいらない。

ていうかなんで漬物ガシヤのなかに、いちごのショートケーキが入ってるのよ。もはや詐欺じゃない。どういうこと？

とりあえずもう一度、硬貨を二枚つき込んで回してみる。  
シュークリームが出てきた。

「漬物を出しなさいよ！」

思わず叫んでいた。小声で。

抜け殻になったカプセルを地面に叩きつけたい欲に駆られるけれど、グツとこらえ、最後の一回と誓いを立てて硬貨を投入口にねじ込む。

「頼むわよ……せめて漬物を出しなさい。六百円あれば、漫画一冊買えるんだから……」

現れたのは、モンブランだった。

——ぬあああああああ!!?!?!?

内心で大絶叫。無駄に精緻なつくりをしているのが怒りに拍車をかける。幾重にもかさなるクリームやてっぺんにちよこんと居座る栗の質感なんて、もう本物と見まごうほどリアルで二百円とは思えぬクオリティだ。だから余計、神経を逆なでされる。ねえ聞いて、ふゆは、紅茶やコーヒーに合うスイーツじゃなくて、緑茶と白いご飯に合うおつけものが欲しいのよ。わかる？ おわかり？ どうーゆーあんだすたん？

「……つたく」

もういい。もういいわよ。こんなもんユニットの二人にくれてやるわ。あの子たちなら、きつと無邪気に喜んでくれるだろうし。小銭で人様の好感度が買えるなら安いもんよ。芸能界じゃ喉から手が出るほど欲しい好感度が、こんなに簡単に、それも予期せず手に入るんだから笑えるわね。とりあえず、モンブランは天才肌で何考えてんのかわかんないあの子にあげて、シュークリームの方はパリピでウエイなあの子にあげよう。残ったショートケーキは、ふゆのもの。なんか、絆アイテムって感じがしていいんじゃないの。三人で似たようなキーホルダー付けてる写真なんてツイスタにアップしたら、結構ウケそう。うん、悪くないわね。結果オーライ、結果オーライ。



ここから切り替えて、元気にオタ活といきますか。まだ一日は始まったばかりだしね。頭の中に積もり積もった予定を消化するために、とりあえずこの場を離脱しようとしたところで、その簡素な張り紙は目に入った。

『注意！ パッケージと中身が一致していない筐体が、ごくまれにございます！ ご購入の際は、ぜひ慎重なる筐体チェックを！』  
なんて迷惑なサービスなんだろう。

自分でも冷めた目つきになっていくのがわかるくらいに幻滅しながら、重い足取りで店を後にした。

わけがない。

しつかり漬物ガシヤも回して、一発で梅干しをゲットしてやったわよ！

ざまあみやがれってもんね！

おうつほつほつほ！！

心の中で、ハイソなお嬢様っぽく高笑いしてやったわ。実際にはやんないけど。ふゆ、そういう路線のキャラはイメージと違うから。

予定が狂ったわ。

まさかこんなことになるなんて。

行く先々で手当たり次第に書籍やらなんやらを買っていったら、両手がふさがるほどの荷物量になってしまった。なんたる迂闊。

あとで通販で買えばいいじゃないと冷静に思うふゆと、今すぐこの実物を手に入れて自分のものになりたいと思うふゆがせめぎ合った結果が、これよ。前者、よわすぎ。やっぱり実物を目にしちゃうとだめね。ついつい手にとってレジに持っていつちやう。アイドルのお給料が入るようになって、心持ち財布の紐が緩んでしまっているのも一つの要因かも。

それにしても、重い。約二ヶ月分の物欲を解き放って快感を得たのはいいものの、後について回るのは物理的重量による不快感。

こんな時に荷物持ちがいれば……と脳裏にひとりの男の顔がよぎったけど、すぐにどでかい消しゴムで消しカスにしてやった。あん

なやつ、知らないわよ。ばーかばーか。

さーて、

「帰ろ帰ろ」

帰って戦利品をずらつと並べて眺めて写真に撮って悦に入っ、それからひとつひとつじつくりと味わおう。そこでごはん食べてお風呂入って撮り溜めたアニメも見て、また戦利品をじゆうぶんに堪能して、眠くなったらやわらかいお布団でぐっすり寝てやるわよ。なにこれ、最高ね。この世の天国じゃない。まあまた数日後にはトレーナーにこつてり絞られている未来を想像すると、すこし憂鬱にもなるけれど。つかの間の休みなんだから、楽しまなきゃ損よね。

日々のレッスンでほんの少しだけたくましくなった両腕にぶら下がる戦利品は、ふゆにとつての希望であり、憧れであり、心の支えだ。ぜったいに落としてはならない。

そんな気概を胸に抱いて店を出たのとほぼ同時に、すーっと、ひと組の男女が目の前を通りすぎていく。

「ん？」

なんか、気になった。

違和感というか既視感というか日常感というか。

ひどく見慣れたものが視界に入った気がした。

気づけば自分の目は先ほどの男女を追っていて、小さくなっていくそれぞれの背中を捉えている。ふゆと二人が通り過ぎた時の位置関係により、目視できたのは女性の方の横顔だけで、そちらには記憶と照らし合わせさせてみても見覚えなんててんでなかった。白い肌に濃い口紅が映える、甘辛系の美人ねって印象だけが残っている。

問題は、男の方。

ふゆの直感が告げている。

アレ、あいつでしょ。

たぶん、おそらく、かくじつに、あいつでしょ。

あいつの私服なんて見たことなかったけれど、なんの特徴もないシンプルで清潔感だけが取り柄みたいな身なりは、すごくしつくりくる。似合いすぎるくらいに、あいつの顔、性格に似合った服装じゃな

いの。いまずぐあの後ろ姿が振り返って、脳裏に浮かべている顔がそこにあったとしても大して驚かない自信がある。確信がある。

でも、あいつは振り向かない。

となりで歩く、ふゆの知らない女と肩を並べて、ふゆから離れていく。

あのひと、なにげに美人だった。

ふゆとは真逆のようなタイプの、雑にくくるならサバサバ系って外見の、美人だった。

そしてなにより、お似合いだった。服がじゃない。並び歩く二人の後ろ姿が、雰囲気、ぴったし雑踏の中に馴染んでいる。

どこからどうみても、誰がどうみても、二人の関係性はそれだと推測するほどに。

現に、ふゆも眼前をふたりが通った瞬間に、それだと自然に認識していた。

それだと。

カップルだと。

「……なによあいつ、ふゆの誘いを断った裏で、しっかりやることやってんじやないのよ」

びっくりした。

ずいぶんとすねた子どものような声が、自分の口からまろび出たものだから。

もつとびっくりした。

小さくなっていくあの背中が、突然こちらを振り向いたものだから。

「えっ？」

なによ。なんなのよ。なんで振り向いたのよ。なんでそんな、いつもみたくニコニコしながらこつちに来てんのよ。驚いたせいか、心音が高まっていくのがわかる。どくどくどくどく、超絶うるさい。

「えっっ？」

あんだ、となりに彼女をはべらせているじゃない。なにそつちほつとして、ふゆのそこ向かってきてんのよ。ほらいま自分の彼氏が付い

てきてない事に気づいた女の人が、足を止めて振り返ったわよ。なのに、なんであんたは止まんないの。なんでふゆのどこ来るの。なんでそんなに嬉しそうなの。ふゆに会えて、あんたはそんなに嬉しいの？

「……………なんで」  
どうしてふゆは今、少しでも、あんたに会えて嬉しいと感じてしまったの？

## 唐突だけれどアンダンテ（後編）

「冬優子じゃないか、奇遇だな」

目の前の男は、そうすることがさも当然であるかのように声をかけてきた。なんだか夢のような世界から、現実には引き戻された気分だ。両手に掴んだ、紙袋が重い。

「……なんで、ふゆに気づいたの」

不自然だった。別にふゆはこいつに声をかけたわけじゃないし、こいつの視界に入ったわけでもない。なのにこいつは、後ろにふゆがいるとわかりきった反応で踵を返したように、ふゆには見えた。

男はほんのり困ったように眉を寄せる。

「なんでって……冬優子の声が聞こえた気がしたからかな」

「……………は？」

なんて言った？　いまこいつなんて言った？　ふゆの声が聞こえた気がした？

『……なによあいつ、ふゆの誘いを断った裏で、しっかりとやることやってんじゃないのよ』

いやたしかにちよつとは声出したけどさあ、叫ぶとか喋るじゃなくてぼやいたレベルの音量だったし、まわりもそこそこ賑やかなのに。それが聞こえただって？

「あんた適当言ってるんじゃないわよ、聞こえるわけじゃないじゃない。もし本当に聞こえたのなら大した地獄耳ね。おっそろしい」

気づいたらふゆは、がーつとまくし立てていた。今日、ろくに喋れていなかった鬱憤でも溜まっていたのかも。

「本当に聞こえた気がしたんだよなあ」

「はいはい、地獄耳確定ね。今度からあんたの陰口叩くときは気をつけな」と

「まず陰口なんて言わないよう気をつけような」

「うっさいわね、というか陰口なんてかわいくない真似、ふゆがやるわ

けないでしょ?」

「いや、こないだ共演者に挨拶ガン無視されたからって、腹立ててなんだから言ってたじゃないか」

「あれは向こうが悪いからセーフ」

「……よくわからんな、冬優子ルール」

呆れたように笑いやがった。しかしどこか愉快げに。

「でも、やっぱり冬優子の声は聞こえた気がしたんだがな」

「あんたまだそれ言う?」

「聞こえたというか、聞こえたことにはしておきたいのかもな」

「……はあ?」

なに言ってるんのかいっ。

「冬優子のファン第一号を自負するくらいなら、街の人混みの中でも冬優子の声を聞き分ける能力くらいは持つておきたいんだよ」

ほんとなに言ってるんのかいっ。

「……きも」

やばい、つい本心が。

「えっ、だめか?」

「うん、きもい」

「……そんなに?」

「きも——」 思い出したもう一人の存在。そういえばこいつは彼女と歩いてたんだからその彼女もこっちに向かってきていて不思議じゃないどころか当然で、すでにふゆの声が聞こえる範囲にその人來ているからすぐさま素のふゆから世界一かわいい黛冬優子にならなきや「お気持ち悪くていらっしやいますですよ」

失敗した。

けど、笑顔でゴリ押す。

「お、おきも……?」「冬優子、いまなんて……?」

カップル二人そろって怪訝な顔。

ちやっかりシンクロしていてイラっとくる。別にふゆは非モテじゃないしなんならモテる方だけれど、いざこざいうのを至近距離で見せつけられると、どうしてもこめかみのあたりが引きつってきてし

まう。

でも今のふゆは、ただのふゆじゃない。

「ふゆ」なのよ。

というわけで、まず挨拶がわりに口角を上げて眉尻を下げ、全世界全事象に対する慈しみを込めて、マシユマロよりも甘くて柔らかい声を奏でてみせる。

「はじめまして、黛冬優子っていういます〜」

「あ、どーも」

反応は冷淡だった。機嫌も少し悪そう。

まあそれもそうか。彼氏が自分のことほったらかしといて、仕事関係とはいえ他の女のところにふらふら行ったらテン下げ不可避だ。ほんとなんだこの男。もっと彼女大事にしなさいよ。ふゆも大事にしなきゃ承知しないけど。

「え〜っと、おふたりって、どういう関係なんですか?」

道端なんだから話し込むわけにはいかないけれど、なにか会話はしなきゃいけないような使命感に駆られて、質問を繰り返した。とりあえず喋るべし。これ、人気も実力もまだまだな駆け出し芸能人の、バラエティ番組出演時における鉄則。

「どういう関係って……ん〜」

ふゆよりも少し年上に見える女性は、となりの男に目配せする。男は少し困ったような顔をしていた。すると女性はニヤツと小悪魔めいた笑みを浮かべて、

「どう見える?」

ウザっ、と反射的に突っ込むのを我慢したふゆ偉い。

「え〜、どうなんでしょ〜」

と、すかさず返せたふゆ偉い。伊達にアイドルやってない。

「ふゆはあ、一瞬、兄妹かな〜って思っちゃいました♡」

「ああ、よく言われる」

真顔でうなづく女性の頭を、ポンと軽く叩く男の手。

「よく言われるもなにも、事実そうだろうが」

「え?」(↑ふゆ)

「えっ?」(↑プロデューサー)

「いや、どうして言ったあんた自身が驚いてんのよ」

「いやいや、いま冬優子が兄妹に見えたって言ったじゃないか」

「あれ? そう? そうだった?」

「ああ、だから兄妹だつて見抜いてたんだらう?」

え? なに? なにがどうなっているワケ? こいつはなんと  
言っただけ。なんか天地がひっくり返るような衝撃的なこと言  
われた気がするんだけど。えーつと。

そう、兄妹。

兄妹。

……………兄妹?

「えっ、兄妹!? 彼女じゃなくて!?」

「あれ、気づいてなかったのか」

「気づくわけじゃない! というか聞いたこともないわよ、あんなに妹がいるなんて!」

「ああ、言つてないからな」

「言いなさいよ! まったくややこしいわね」

「ええ……そんなの、わざわざ言う必要ないだろ……」

「あるの」

「そうだよ兄貴、猫かぶるの忘れるくらいに動揺してるみたいだから、  
あらかじめこの子には妹がいるけど彼女はいません、むしろ募集中で  
すつて懇切丁寧に説明しておくべきだったんだよ」

「……」

「……」

—— やつてしまった。

いやまだ挽回できるはず。

「え、え? ふゆ、難しいことよくわかんないですけど、猫なら好き  
ですよ。アメリカンショートヘアとか……その証拠に……ほら!  
ショートケーキのキーホルダー♡ ね? とつてもかわいいです  
よね」

「無理だ冬優子、無理がありすぎるぞ冬優子」



「うっさいわね！ ……あつ」

「ほらな」

呆れ混じりに鼻を鳴らす男をキツと睨んでやったけれど、なんの効果もない。妹の方はといえば、口もとを手で押さえてクスクス笑っている。

「冬優子ちゃんって、やっぱり面白いんだね」

「……は？」

急に何言い出すのよこの女。いくらプロデューサーの妹だからって、下手な事言われた時には承知しないんだからね。

「だって、うちの兄貴、最近いつつもアイドルの話ばかりしてさ。あーべつに、冬優子ちゃんのこと名前を出して喋ってるわけじゃないんだけど、担当アイドルの話ばかりして。今日のレッスンではトレーナーから褒められてたとか、俺の耳でもわかるくらいに歌が上達してるとか、日に日に魅力的になっていくのが目に見えてわかるからやっぱりアイドルはすごいとかなんとか毎日のように聞かされるわけ」

「……おい、そのへんに」

兄の制止を、妹は一瞥すらしない。家庭内ヒエラルキーが透けて見える。

「こないだの、ウイング？だっけ。それで冬優子ちゃん優勝したんでしょ？ その時もこの兄貴、珍しくお酒飲みながら担当のここがすごかったところが良かったところが成長したって誰も聞いてないのに喋り倒してさ、もう、その子のことだけ好きなんだよってアタシ思ってた」

「へー、ふーん、へえ〜」

「そしたら今日もこの兄貴、担当アイドルの趣味について勉強したいからアキバについてきてくれとか言ってきた、せつかくの貴重な休みをつぎ込むくらいにのめり込んでみたいだから、あつ、これガチのやつじゃんって」

「へえ〜、ふう〜ん、なるほどねえ〜」

ほほのニヤつきがさつきから治らないんだけど、知ったこつちやな

い。普段は常にどこか余裕を保っているくせに、妹さんにいろいろと暴露されてしまつてうろたえている男の顔をジロジロと見つめてやるのが、楽しくて楽しくて仕方がない。

「ていうかあんた、妹さんと一緒にアキバ来るくらいなら、ふゆと一緒に来れば良かったじゃない」

「いや、それは……」

「ああ、アタシもそれ思った」

「しかし、俺と冬優子はビジネスライクな関係であつて、オフの日にまで共に行動しては世間の目や契約関係のあれそれがうんぬんかんぬんで」

「あーはいはい、おためぐかしはもういいから。行くわよ」

「行くつてどこに……」

とぼけた顔するあんたに向けて、ふゆは告げた。

「あんたは担当アイドルの趣味について勉強したいんでしょ？ なら、ふゆと一緒にこのへん歩き回るのが手っ取り早いのよ」

「だね、ほんとそれ」

妹さんの相づちで勢いを増したふゆはもう誰にも止められない。

重たくてしようがなかったはずの手荷物は、いつのまにかそんなに重たく感じなくなつてたけれど、とりあえずあんたに押し付けて、自由になつた右手で大きな背中をパンツと叩く。

「さあ、行くわよー」

「……はあ、わかつた。わかつたからそう急かさないでくれ」

すこし気だるそうに、でもどこかまんざらでもなさそうに息を吐いたあんたは、ふゆのとなりを歩き出した。

ふゆと歩幅を合わせて。

呼吸のタイミングですらも、ふしぎとぴったり重なっているような気がした。

(おしまい)

コラツ！ 摩美々ツツ！！ すこだツツツ！！

「もうひと頑張りすれば、帰れるぞ……」

夜の八時過ぎ。

窓の外はもちろん暗く、人工の灯りがチカチカとまたたいていて、事務所内も話し声などとならない。はづきさんと社長は定時退社を決め込んだし、俺も本来は同じくらしいの時間帯に定時おうちダツシユを披露するつもりだったのだが、おしごとというものは不思議な具合に降って湧くもので、いつのまにか終わりの見えぬ労働に身を費やしてしまっていた。

「……ん？」

息抜きも兼ねたトイレ放尿大サーカスから戻ってくると、デスクワークのおともである椅子に異変が生じていた。

先ほどまではまつさらだったお尻との接地面に、クッションが敷かれているのだ。

当然、身に覚えはない。

なんだか異様にカラフルでファンシーなそいつは、どうぞ尻に敷いてくださいとばかりにもこもこしており、こいつを駆使すれば地獄のような残業も多少は楽になるだろうし、まあケツの下敷きにしてやるのもやぶさかではない。心して俺のケツに触れるがいい。なんて思いながら座つたのか間違いだった。

——ブツ。

「ヒッッッッ」

俺の高貴なるヒップの下から過剰な放屁音がした。もちろん俺がおならをしちやうなんてことはプロデューサーである以上まずありえないので、きつと妖精さんの仕業かなんらかの化学反応が起こったと考えるのが妥当だ。あたりを嗅いでみても臭くはなく、ましておならが出る感触すらなかった。いったい何が起きたというんだ……。

「ふいふー」

という忍び笑いが聞こえた瞬間、脳の中で火花が散って最適解が生

まれた。

即座にケツの下のクッションの下の物体Xを引っ掴んで、声がしたソファアの方向を視認。

やはり、いた。

「コラッ！ 摩美々ツツ!!? ブーブークッションを仕掛けるんじゃない！ びっくりして、びっくりするだろうが！」

まさか俺以外に、事務所の中に人が残っていたとはつゆほども思っていなかったため、驚きと若干の恐怖が入り混じって語彙力が死んでしまった。

むくりとソファアから起き上がった摩美々はさぞ愉快そうに、くつくと笑っている。なにがおかしいんだろう。愚問か。俺の反応を見て楽しんでいるのだ。あやつは。

「本当に良いリアクションですねー。いまどき、ブーブークッションなんかであんな反応する人、なかなかいないですよー」  
「くっ……」

摩美々をプロデュースする過程で、ある程度イタズラには慣れてきたとはいえ、そこまで言われると少し悔しいな。我ながら、こんな古典的なイタズラに面白いように翻弄されてしまうのも大の男としてどうかと思ひもする。

「だいたい、どうして摩美々がここにいるんだ。今日のアンティカは、レッスンは直帰のはずだったと思うが」

「あー、それがですね……実は咲耶が事務所に忘れ物をしたらしくてー」

「咲耶が？ 珍しいな」

「そう思いますよねー。なんでも、家の鍵を置き忘れたみたいで」

「一大事じゃないか。どうするんだ、もう夜だぞ？ いくら咲耶といえど女の子だし大事なアイドルだし知名度ももちろんあるし——」

咲耶は寮住まいだから、いぎという時は他のアイドルの部屋に泊めてもらえればなんとかなるだろうが、それでも家の鍵だ。失くしたとしたら困りものだし、失くしたと思うだけでも肝が冷える。

しかし摩美々の口ぶりからは、ことの重大さがあまり感じ取れな

い。それは摩美々が元来もつ空気感によるものなのか、本当に大したトラブルではないのか。

「どうやら今回は後者のようだ。」

「大丈夫ですよー。失くしたわけじゃないみたいなので」

「え？」

「さつきも私、言いましたよねー。咲耶が鍵を置き忘れたいって」

「……あつ」

「失くしたなんて、一言も言ってないんです。私も、咲耶も」

「確かに、そうだったな」

「そうだ。確かにそうだった。」

咲耶が『置き忘れた』と言ったのであれば、鍵のありかにはきつとあたりがついているのだろう。それに咲耶が声高に失くし物をしたと言いつらし、周りを混乱させる状況はあまり想像できない。考えてみればたやすく察せられるのだが、わざわざ摩美々がそんな回りくどい言い方をする意味がわからない。

首をかしげていると、まともや摩美々がくすくす笑いだした。本当によく笑う子だ。

「だからあ、プロデューサーは、警戒心がうすすぎるんですよー」

「……なんだって？」

「鍵の件は少しでも考えれば、慌てたり騒いだりようなことじゃないってすぐにわかるはずですし、さつきのクッションだってー」ああ、そこにつながらるか。「少しは不審に思うはずですよー。せめて部屋の中に誰がいる可能性くらいは考えるはずなのに、プロデューサーときたらなんにも疑わずに座つちやつてー。おっかしいですねー」

水を得た魚のように、とはこのことか。

いたずらが実を結んだ上でさらに追い討ちをかけるべく、ペラペラと俺の落ち度を語る彼女は、たまらなく楽しそうで魅力的なのだが、一方で、俺の心中で眠っていたものが起き上がり、むくむくと育てていくのを感じていた。一度よみがえってしまえば俺自身でさて手のつけようがない、この厄介物。

その名を反骨心という。

中学の頃、親に対して猛威を振るったそいつは、十年ほどの時を超えて、俺のちつぽけなプライドが崩壊しないよう支えるために戻ってきてくれた。おかえり、マイブラザー。

「霧子から聞きましたよー。今朝もプロデューサーが造花に水をやるうとしてたつてー」

「ぐっ、それは……」

目の前のニヤケ顔を、どうにかして仰天させてやりたい。

しかし、一向に突破口が見つからない。

「さすがの霧子も、プロデューサーのうっかりには呆れてたりしてー」  
「うう……霧子……」

きりこすき……。

どうにか一矢報いたいのにきつかけがつかめず、焦りからか何かを握りしめていた右手に力が入る。ゴム特有の感触が手のひらに染み渡ると同時に、闇の深い一寸先にひとすじの光が差した。うん……いける、これならいけるぞ……!!?

「クッションのことも霧子に伝えておきますねー。ふふー、どんなリアクションになるのか、たのしみになってきましたあ」

「摩美々よ」

「……? どうしたんですかあ?」

光明を見出したことで急速に湧いた自信が、表情にあらわれたのかもしれない。摩美々は怪訝そうに眉を寄せて、俺を見つめている。願わくばその目が見張られることを祈りつつ、右手に握ったそれを摩美々の眼前にかかげた。

「これ、なーんだ」

「なにつて、ブーブークッションですケド」

摩美々は眉間にしわを寄せて困惑している。至極真つ当な反応だ。

続けて俺は、問う。

「じゃあ、ここはっ」

指先で示したのは、クッションを膨らませるために不可欠な出っ張りの部分。つまりはブーブークッションの――

「吹き込み口? それが、どうかしたんですか」

「どうもしたもなにも」

吹き込み口。内部に空気を送り込むために必要な部位。送り込み方は簡単だ。人がそこをくわえて勢いよく息を吐けばいいだけである。そう、くわえて。啞えて。口を、つけて。

逆に言えば、ブーブークツションを膨らませるには、口づけせざるを得ないのだ。吹き込み口に。つまり、俺のお尻の下敷きになったブーブークツションも例外ではなく誰かの口によって息を吹き込まれたわけで、それを敢行したのはこの部屋にいる俺以外の人間である摩美々しかありえない。

俺は口を開ける。パニック映画のサメをイメージしながら、大きく大きく開口する。

「いつたいなにを……」

——するつもりなんですか。とでも訊ねるつもりなのだろう。決まっているじゃないか。口に含むんだよ。摩美々が口づけたクツションの吹き込み口を。そんで口内でべろんべろんに舐め回して、ちゅーちゅー吸って摩美々の唾液エキスを思う存分堪能したすえに、ようやく口を離して、唾然とする摩美々に向けて言い放ってやるんだよ。うーん、デリシヤス！って。

もちろん嘘だが。

せいぜい大きく開いた口に、クツションを徐々に近づけていって、摩美々がその意図に気づいた頃合いでやめるつもりだ。というか顎が痛い。外れそう。ずっと口を開けていると歯医者を思い出すからつらい。それ以前に口を開くことばかりに意識がいつて、摩美々の表情がうかがえない。本末転倒だ。

ただ、ここでようやく、

「えっ、あつ、ちよつとそれは……」

という若干ながら狼狽した摩美々の声が聞こえたので、ささやかな仕返し劇は閉幕することとした。口を閉じる。視界が心持ちクリアになり、気まずそうに目をそらす摩美々のようすが見て取れたので溜飲が下がった、ような気がしたところで背後に気配が。

「プロデューサー、なにをしてるんだい……?」

振り返ると、ドアのすぐそばにスラリとした王子様系美人が佇んでいた。そういえば摩美々は咲耶の付き添いで来たんだから、咲耶も事務所にいると考えてしかるべきだったな。

「摩美々も、一緒になつてなにを……」

「ああ、それがだな」

「実はあ、咲耶が膨らませたブルークッションをプロデューサーが食べようとしちゃってー」

「なっ!? コラッ！ 摩美々ツツ!!? なにをバカなことを!」

近づいてくる咲耶にどう答えるべきか逡巡していると、摩美々に機先を制された。しかも咲耶は摩美々の言い分を若干信じているらしく、「ええ……」と引き気味だ。

「咲耶、違うからな。これはいつもの摩美々の冗談であつて、決して俺は食べようだなんて考えていなくて」

「プロデューサー……いくら信頼しているアナタとはいえ、限度というものがあつてだね……」

ガチトーンでさとすように言われた。ショックで膝が折れる。

「信じてくれよお……」

「信じたいのは山々なんだけどね。でも現にプロデューサーがクッションに向かって大きく口を開けているところは、私も目撃していたから」

「見ていたのか……」

どうやって誤解を解けばいいのだろう。膝をつき、視界に広がる事務所の床はなんにも答えてくれない。いつときの思春期じみた反骨心に身を任せるのはダメだ。後悔しか生まれない。

「ふふー、霧子にも伝えておきますねー。プロデューサーが、担当アイドルとの間接キスに過剰に興奮する性癖の持ち主だつて」

「やめて……やめてくれえ……」

すぐさま懇願する。もしこの話が誤解のまま霧子や恋鐘に伝わったとしたら、きつと優しいふたりだ、表面上はぎこちないながらも普段通り接してくれるだろうが、心の中ではおそらく俺のことを軽蔑して……。なんか気持ち悪くなつてきた。吐きそう。



「あとー、霧子で思い出したんですけど、誕生日でもなんでもないので名前が一緒だからって突然、切子をプレゼントするってどうかと思いますよー。霧子もちよつと困ってるぽかったですしー」

「づゝえゝゝえゝゝ（嗚咽）」

知りたくなかったそんな事実。こんな思いをするのなら花や草に生まれたかった。

「摩美々、もうさすがに勘弁したらどうかかな。プロデューサーも相当こたえているようだし。なによりやはりプロデューサーが本気でクツションを食べようとしていただなんて、私には考えられないよ。ブルーブックツションはパーティーグッズであつて、決して食べ物ではないのだから」

咲耶、やさしい……言ってることはすんごい当たり前のことだけだ。

「えー、でもー」

「ほら、もう夜も遅くなるから帰ろう。ああ、そうだ。摩美々さえ良ければどこかで一緒に夕飯を食べていらないかい？ 私の忘れ物のせいで事務所までついてきてもらったんだ、ごちそうくらいはするよ」

「まあ、咲耶がそう言うなら行かなくはないケド」

「その必要はないぞ、咲耶。なぜなら俺が奢るからだ」

「太っ腹だね、プロデューサー」

「ええ……復活が早すぎないですかあ？」

「リカバリソーダ飲んだからな」

「それなら納得するしかないですケドー」

†

このあと俺たち三人はファミレスでご飯を食べた。

事務所での摩美々と俺のいざこざについて詳しく話すと、咲耶は少し呆れながらも笑ってくれた。いつものことだね、と言われるとちよつと引つかかったが。それだと俺がいつも嗚咽してるみたいじゃないか。

意趣返しのももりなのだろう。摩美々は自分のオムライスを乗せたスプーンを、あろうことか俺に「あーん」してきた。据え膳食わぬ

はなんとやらなので、俺が勢いよくかぶりついたところを咲耶がスマホで激写したらしい。それをラインのグループチャットにでもアップしたのだろう。すぐに恋鐘から『ずるかく！ 今度の仕事終わりにうちもプロデューサーとごはん食べに行きたかく！』とメッセージが入り、数分後には霧子から『こけ、こけ』という文章が鶏の写真とともに送られてきた。謎だ。

その際、震える指先を抑えながら、霧子に江戸切子をプレゼントしたのは迷惑だったのかと聞いた。するとまた数分後に、自室の机らしきところに贈った切子が飾られている写真が送られてきた。『とてもきれいで、よくじつと見つめてしまつて、時間を忘れてしまいます』とも頂戴した。

あまりの嬉しさにその場でふたりに報告すると、なぜかふたり揃って反応が微妙だった。よかったね、よかったですねーとは言ってくれたものの、なんだか歯にものが詰まったような言い方で気になったので、もぐもぐとごはんを食べながらふたりの微妙な反応について考えてみた。その理由はすぐに予想がついた。霧子への贈り物が大事にされているのを見て、羨ましく思ったのだろう。

だから俺はすぐに、ふたりに助言をした。思えば無駄に上から目線な口調だったかもしれない。

「霧子はきつと二人からの特に理由のない贈り物にも喜んでくれると思うぞ。だから買い物途中なんかで、ああこれ霧子に似合いそうだなとか思ったら余裕のある範囲で買えばいいんじゃないかな。うん。ちなみに俺のオススメは江戸切子って言うんだけどな、調べてみたらわかるはずなんだがとてもきれいで、作ってる職人さんもさあ——」  
たしかそんなふうに講釈を垂れた記憶がある。

ただ、なぜだか摩美々と咲耶の反応は依然として芳しくなく、

「そうじゃないんですよねー」

「うん、そうじゃないんだよ、プロデューサー」

と渋い顔で言われた。

なぜだ。わからん。

後日、九州に旅行に行った友人から頂いたお土産（あごだしラーメ

ン)を恋鐘におすそ分けしたところ、飛んで跳ねて喜んでもらった。それを横目で見ていたらしい摩美々から、背中とスーツの間にトカゲを入れられるイタズラを受けたのだが、そばにいた咲耶は助けられなかった。

なんで？

「しようがないなあ、Pたんは」

「ん？ おお、結華、グミ食べるか？」

「うーん」一瞬、悩むようなそぶりを見せた結華は一転、にやあとどこか猫のように笑みを浮かべると、「Pたんが食べさせてくれるならいいよ」

「はい、あーん」

ノータイムで口もとに押し付けてやった。

「あむっ、……もうPたんったら強引なんだから」  
爬虫類が飛んできた。

(おしまい)

## ストロベリームーンが見ている

こんにちは。いやもう、こんばんはと告げてもいい時刻かな。はじめましての人ははじめまして。一年ぶりのあなたには、ご無沙汰しておりますとでもあいさつしておきましょうか。

どうも、東の空にぷかりと浮かぶ赤い円形、名前をストロベリームーンといいます。どうぞよろしく。

いやー、ねえ？　なんといいですか。

年がら年中365日、あるいは366日、太陽さんとの二人体制でシフトを組んでるお月様なんですけど、やっぱり今年もこの日だけは休ませてくれて聞かなくて、しょうがないから私がこうして出てきたわけなんですけど。

いかんせん私ってほら、赤い体をしてるじゃないですか。姿形はお月様と瓜二つでそっくりさん状態なんですけど、色だけがこの通り違うわけなんです。

だからなんですかね。

人間たちのあいだでは、私のことを別名『恋をかなえてくれる月』と呼んでくださることもあるそうで。

いやあもうね、ありがたいのなんのって。

恋ですよ、恋。

私もしてたなあ。若い頃の話ですけどね。それも叶いようのない無謀な恋でしたけど。だって相手が、あの太陽さんですよ。いつまで経ってもぐるぐるのお空の上を追いかけてっことしているうちに、なんだかこう、好きになっちゃって。追いつけるはずもないのにね。もうあの頃の気持ちは思い出せないですけど、いい恋をしていたなあって記憶はあるんですよ。でへへ。

しようもない自分語りはこの辺りにしておいて、どうやら今年も全世界各地から恋の願いごとが私のもとに届いているみたいなので、ちよつくら覗かせていただくと思いますか。

おっ？ おおっ？ この、ひとときわ強い恋慕の情を発しているのは、誰だろう？ 場所は日本だねこれは、そしてその首都の東京で、えーっと、東京にお住いの女の子だね。女の子。やっぱりこういうおまじないとか好きなのは女の子だって、相場が決まってるんだよね。恋のおまじないに躍起になる男の子も、それはそれでかわいいからアリだけど、今年のところは女の子に決めたっつと。

地表をズームして拡大して凝視してやっと思えてきた。身長差のある男女が、近代的な街中を歩いている。男の方はどの国でも流通しているようなスーツ姿で、女の子の方はあれだね、日本特有のジャパニーズKIMONOってやつだね。着物。あれどうやって着て、どうやって脱ぐんだろ。ざっと付近を見下ろしてみてもあんまり着ている人を見かけないってことは、今となっては日本の中でも希少性があつて値段もそこそこするのかな。

そんな着物を身にまとい大和撫子然とした女の子が、小柄な体躯に見合わず肥大した想いを抱えているようだから、さらに興味がひかれていく。となりの男はなんか普通。普通すぎて逆に怖い。

なにはともあれ、まずは心を読ませてもらおうか。

「寮まであと五、六分つてところか」

とは男の弁。心の中で考えてることをそのまま、まるつきり修飾も省略もせず口に出したようだ。頭からっぽなのかこいつ。

にしても寮か。男の方は社会人といった出で立ちだから、入寮をしているのは女の子の方だろうか。男はふだん、女の子を監督する立場か役職についているため、こうして帰路に付き添っているのだろう。そうでなければ、あと考えられる間柄は恋仲くらいだ。その可能性もないわけではないのかもしれないけど、どうもそういう浮ついた雰囲気はふたりから感じられなかった。

「もうすこし、寮と事務所の距離が近くてもよかったかもしれないな」  
「……いえ、リンゼはこのままでも」

リンゼ？ リンゼというのかこの女の子は。鈴が鳴るような声で告げられた聞き馴染みのない単語は、彼女の立ち振る舞いと合わせてみれば、じんわりと馴染んでいくような印象があった。似合ってい

た。名は体を表していた。

「たしかに、事務所のあたりって人の通りも少ないとは言えないし、そこらに寮を構えちゃうのは良くないかもな。騒音とか防犯的にも」

「……リンゼは」

「ん？」

言葉を詰まらせた少女の胸の内が気になり、覗いてみた。

『凜世は、プロデューサーさまのお隣で、できるだけ長く歩いていたいだけなのです……』

ハツとした。

凜世、そういう字を書くのか——ではなく、世界にごまんという乙女を差し置いて、私の目が留まるほどの想いを抱えていた少女なんだ。心を読めば、こういったセンチメンタルを暴いてしまうのは当然だった。

静かでありながら、確かに灯っていた小さくて色濃い想いはしかし、外気に触れることはなく、まぼろしのように消えてゆく。

「ご覧ください、プロデューサーさま。こうして外を歩いていると、さまざまなものが目にとまります……」

少女の赤みがかかった双眸に射抜かれた。一瞬、私がこうして観察しているのがバレたのかと肝が冷えたが、そんなわけはない。

『あまのはら ふりさけみれば かすがなる みかさのやまに いでしつきかも』

彼女は、声に出さず呪文のようななにかを唱えていた。なんじやらほいと疑問に思っていると、小さな彼女のからだのなかで、風景が広がっているのに気づいた。山が見える。鳥が飛んでいる。きつねが横切った。石畳を踏む感触がした。竹箒を握った。紅の鳥居がそびえ立っている。山の陰に夕日が沈んでいく。うしろのそらに、私がいいた。いつの日かの私。赤い月。夕日の残滓と、私が放つおぼろげなひかりに照らされて、ひとりの女の子がなにをするでもなく立っている。それを離れた場所に立つ女の子が見ている。ふたりはよく似ていた。というより、背格好はほとんど同じで、違うのは身にまとった衣服だけだ。

ようやく彼女の心情が、私の中で循環した。理解できた。

彼女は今の私を見て、過去に故郷で見た私を思い出し、想いを馳せていたようだ。さきほど唱えていた呪文のようななにかにも、そのような意味が込められていたのだろう。

「おつ、なんだか今日の月は赤く見えるな」

男が驚いたように声を上げる。少女の視線を追って、やっと私の存在に気づいたらしい。にぶいやつだ。

「なんだか、まるで凜世の瞳の色みたいだ。きれいだな」

「……プロ、デューサーさま」

なんて歯の浮くようなセリフなんだと、傍観者の私はモヤつとしたが、少女は無反応に見えて内心で混乱しているみたいで面白いから、まあよしとする。ちなみに今現在、彼女の心中風景では、自身の故郷らしき神社で結納の儀式を執り行うふたりの姿が見えた。幸せそうで、なによりだ。

「でも、残念だな」

「……どうかなされたのですか」

「もうすぐであるの月、雲に隠れてしまいそうだ」

えっ？　なんですって？

見回してみると男の言うように、雲が私の視界をさえぎろうと等速運動していた。しかもなかなか分厚くて規模も大きい。このままのペースでいけば三秒後には、あのふたりの姿が見えなくなってしまう。

「……また来年、こうしてお目にかかれれば、嬉しく思います」

「そうだな」

男の相槌を最後に、私の視界は雲一色となった。

あの男は少女の言っている意味がわかっていたのだろうか。あの子は、来年もあんたの隣で私を見上げたいと遠回しに伝えてるんだぞ、そこんどこわかってんのか？

わかってないだろうなあ……。

なにはともあれ、あの凜世という素敵な女の子の恋愛成就を願って、私は知り合いの星たちに頼んで、五発ほど流れ星を撃ってもら

いじりました。

(おしま)



## 雨の日はすこしだけ踵を上げて

「つもー、サイアク」

マスクの中でため息をついても、さつき食べたチョコミントアイスの香りが鼻に入ってきて若干の清涼感があるだけで、大して気分は晴れない。

晴れていないのは気分だけでなく、予報の外れた天気もそうだった。降水確率三十%と今朝は予報士が言っていたはずなのに、しとしとと空から降ってくる雨粒たちは、ふゆが電車に乗っているときから姿を現し始めた。その時点では、すぐに止むものだと思っていた。でも、事務所最寄駅のホームに降り、人の波に乗って改札を抜け、著名なアイスクリーム店で買ったアイスを一いつ食べ終わった今になっても、鈍色の空は泣き止まないでいる。

折りたたみ傘くらい携帯しておくべきだったわね。

立ち止まって壁に背を預けるふゆの前を、同じ乗客だったひとびとが通り過ぎていく。その過半数が色とりどりの傘を花のように開かせながら、ほの暗い雲の下に躍り出て、思い思いの方角に歩き去る。傘の群れの中にまばらに紛れ込んでいる黒い頭は、雨に濡れることをいとわれない豪快な、あるいはおおぎっぱなひとたちなんですよ。

対して軒下に残されるのは、ふゆのように雨から身を守るすべを持たないひとと、雨に濡れてまで先を急ごうとは思わないひとたち。十人にも満たない数ではあるけど、みんな焦ったようすはなく、スマホや文庫本に目を落したり、ただぼうつと虚空を眺めたりして、通り雨が上がるのを待っている。

……通り雨よね？

予定の時刻まで余裕があるとはいえ、その時間はせいぜい一時間程度。この調子で雨が弱まることもなく降り続けるようだったら、多少の被弾は覚悟しなければならぬ。むしろ強まってしまった時には、そうね、召喚呪文でも唱えてやるわよ。

??

この壁に寄りかかってから、どれくらいの間が経っただろう。いまハマってるソシヤゲのデイリーミッションをこなして、単発ガシヤも回し、その結果になんの感情の波も起こらないまま、習慣じみた指さばきで開いたツイスタ上にて繰り広げられていた女性アイドルたちの微笑ましい会話に、無粋な横やりを入れていたオタクくんへ芽生えたかすかな殺意をなんとか鎮めきつたまでの時間経過だから、たぶん二十分くらい？

依然、雨は降り続いていた。

弱まることも、強まることもなく。

変わったのは、ふゆと同じように雨上がりを待つひとたちの顔ぶれくらいだ。ふしぎと人数はそう変わりない。駅に電車が止まるたびに増えそうなものだけど、止まない雨にしびれを切らしたひとの数だけ減ったようで、結果ほとんどプラマイゼロと見てとれた。

タクシーを利用する手もあるにはあるんだけど、どうしても料金が割高に感じてしまつて気が乗らない。貧乏性なんじゃない。言うほど節約家つてわけでもない。ただ、そこにお金を使うくらいなら、我慢してオタ活費用に回したいってだけ。よつてタクシーは最後の手段という位置付けに。

「……」

降り始め特有の雨の匂いなんて、もうとつくにしなかった。あの匂いにもたしか名称があつたはず。なんだっけ。『雨 匂い』と検索しようとしたところで、通知バナーが画面上部から降りてきた。ストレイライトのトークルームだ。

『虹つすよ、虹！』

メッセージを発信したのは、ふだん突飛な発言、行動でふゆやあいつを右往左往させているあさひちゃんだ。ついさつき撮つたらしい写真もアップしている。ここら一带は雲に覆われているものの、遠い空には青が広がっているらしく、あさひちゃんがスマホで捉えた写真にはうつつすらとした七色が写し出されていた。

虹なんて、久しぶりにみたかもしれない。

七色なんだっけ、虹って。なんで七色に見えるんだろう。最後に、直に虹を見たのはいつのことだったか。ぼけっとした頭で記憶をさぐりさぐりしていると、また文字列が浮かび上がった。

『めっちゃキレイじゃん！』

間髪入れずに、楽しいなスタンプが二、三個連発される。愛依ちゃんだ。すごく、愛依ちゃんだなあ、と思った。

ふゆも文字をフリック操作で打ち込んで送信。

『うわあ、すっごく綺麗〜！』

かわいらしいなスタンプもひとつ、なんとなくの感覚で選択して送りつけて、スマートフォンをかばんにしまう。くぐもった通知音が聞こえた。ふたりのうちのどちらかが、メッセージかスタンプか送ってきたのかもしれない。

たしか湿度をともなった風を、頬に感じた。

あの写真は、いつ撮られたものなのかな。風がやってきた方角に目を向けても、見えるのは建物と灰色の空ばかりで、七色なんてどこにもない。せめて雲の切れ間が見えてくれれば、雨がやむ余地を想像できるんだけど、それすら見えなくて若干の焦りが心に生まれてくる。

これは、やまないっぽい？

またもスマホを取り出し、ここら一带の天気を調べてみる。現在地に向かって、西から黄色で示された比較的降雨量の多い雨雲が流れてきているのがわかって、思わずため息をついてしまった。ミントの香りはもうしない。

どうしよう。

視線の先で無情な天気予報をしらせるスマホのさらにその先、ふゆの足を白いパンプスが覆っている。昨日買ったばかりの新品同然の代物だ。前から欲しかった一品で、そこそこの値段もしたしなるべく汚したくない。

迂闊だった。なんで今日のような足元の悪い日に限って、新品をおろしてしまったのよ。すこしくらい我慢して、完全に晴れだとわかったうえで履けばよかった。ていうかだいたい今日は曇りの予報だっ

たでしよ。おのれ天気予報。恨むわよ。

「はーあ」

今日は、ストレイライトの全員に集合がかかっていた。仕事に関するなんらかの説明があいつの口から行われるもんだと、ふゆは想定している。他のふたりはえらく楽しみにしているようで、昨日はトールーム上でどんな仕事がいいだのどんな衣装を着たいだの大いに盛り上がっていた。番組出演とかタイアップもいいけど、ふゆはとにかくかわいいのが良い。

そういえば、ふたりはこの雨の影響を受けてないのかな。

いつのまにか謎のスタンプ合戦になっていたユニットトールームに、疑問を投げかける。

『あさひちゃんと愛依ちゃんは、時間までに着きそう？ 雨、だいじょうぶ？』

即レスが返ってきた。

『もう着きそうっすー！』

『だいじょうぶ系〜』

どうやら足止めをくらっているのは、ふゆだけみたい。

続けて、ぽこん、ぽこん、とふたりからのメッセージが浮かび上がる。

『冬優子ちゃんは？』『だいじょうぶっすか？』

反射的に、返信していた。

『だいじょうぶだよ』って。

大丈夫じゃないくせに。

まあ、仮に大丈夫じゃないと告げたところでどうなるわけでもないしね。ふたりは運転できるわけでもないし、迎えにきてもらうのも悪いし。

徒歩で十分。小走りで五分。

それだけ我慢すればいいだけの話。

がんばるぞいと気合いを入れて、もたれかかっていた壁から背を離れた瞬間、

目がくらんだ。

ような気がしただけで、実際はあたりが刹那的に光に包まれたみたいだった。

雷か、と直感して数秒後、案の定、ゴロゴロゴロと不穏な音が遠くから聞こえてきた。

ほどなくしてザーツと雨の勢いが強まる。心なしか雨粒自体のサイズも大きくなったように感じる。そこらを歩いていた行人が数名、小走りで軒下であるこちらに避難してきた。ひえーだのうあーだの、言葉にならない声を上げながら服についた露を払っているけれど、その行為が気休めにしかなくなっているように見える。すつかり本降りになってしまったみたいね。

やっぱり、歩くのも走るのも、ここは断念するしかないわ。

でも、遅刻なんてもつてのほか。

この程度で誰かを頼るのは忍びないけど、背に腹はかえられない。

よし、召喚呪文を唱えましょう。

『あんた、いまヒマ？』

これだけの文字を打つのに、なぜか妙に時間がかかった。そしていまだに送信ボタンを押せないでいる。約束の時間までは、あと三十分。まだ若干の猶予があるとはいえ、あいつを呼び出すにしてもなるだけ早く迎えを要求しておかなければ、間に合う確率も時が進むにつれて下がっていく。あいつがすぐに連絡を確認できるかどうかもわからないし。

なにげに、ふゆから業務連絡以外で電話なりメールなりするのって、初めてじゃない？ いやそれ以前に、あいつからプライベートな連絡なんて、来たことなかったし来るはずもなかったわ。いつだって業務連絡。あいつって、仕事以外の日に、アイドルとどっか出かけたり通話したりするのかな。ふゆには関係ないけど、気にならないこともない。ふゆには関係ないけど。ほら、アイドルって休みの日でも特に異性関係には気を張っておかないとだし、いちばん距離の近い関係の異性があいつって子も少なくないだろうし、なんというか、ねえ？ ふゆには関係ないけど。とにかくあいつは気を遣わなきゃいな

いはずなのよ。アイドルのプライベートにも  
で、なんだつけ。

……ああ、送信しなきゃいけないんだった。  
はい、送信送信。

こんなもん、業務連絡に変わりないわ。

さーて、さっさと確認してくれるわよね、業務連絡なんだから。  
的確で迅速な対応を期待してる……わあ？

はあ？

——なんでいんのよ。

ていうかふゆ、見つけんの早すぎでしょ。

あいつまだこっちに気づいてないんだけど。

まばらな人の波に乗って現れたあいつは、ふゆの視線が孕む温度か  
湿度に気づいたのか、もしくはは自然と視界の中に映るふゆに気づいた  
のか、通行の流れからはみ出してこっちにやってくる。その右手に  
は、透明なビニール傘がしっかりと握られていた。

「こんなところで、どうした」

「……見ればわかるでしょ」

無駄にほどよく整った顔を得心したような表情に染めて、プロ  
デューサーは言う。

「ああ、傘を忘れたんだな」

他人からずばり失態を突かれてしまうと、幼い反骨心めいた何かが  
芽生えてきちやうのはなんでだろう。

「……そうよ。天気予報を過信していた愚かなふゆを笑いなさい」

「はは」

「愛想笑い下手くそすぎでしょ」

「まあ、誰だつてちよつとしたポカくらいするさ」

「下手な慰めもいらさないわよ」

「今日こんな目に遭ったんだ。明日はきつと今日より良い日に——」

「根拠のないポジティブ論も結構」

「そ、そうか……」

せつかく相手が思いやりをもって応じてくれているのに、向けられ

た親切を無碍にするような言葉で切つて捨ててしまう。それがいまのふゆ。ヘドが出るほどかわいくない。アイドルのふゆとは同一人物と思えないほどだし、家族と接する時の方がまだかわいげがあるはず。

「にしても、雨、どんどん酷くなつてきてるな。まさかここまで降るとは」

「まあ雨つて不幸の象徴みたいなもんだしね。こうしてあんたと偶然、遭つちやつたのも領けるというか」

「うっ」

「なに本気でショックを受けた顔してんのよ。冗談に決まつてるじゃない」

「だよな……」

でもどうしても、こいつの前だと、考える前に口が動いてしまうというか、遠慮や配慮の欠けた発言をしてしまうというか、とにかく、ぜんぜんかわいくないふゆになってしまう。

素をさらけ出す前は、かわいいうふゆのままに接することができたのに。

アイドルとしてどんなときもかわいい存在でありたいと思うふゆにとつて、こいつの前でも少しくらいかわいい姿でありたいと思うのは、至極当然の理なのよ。

かわいくない素を見せていても、かわいいと思つてほしい。なんて、傲慢すぎるわよね。

せいぜい、かわいくない素を、できるだけかわいく思われるようにしていきたい。

このくらいが、健気さが感じられていいかも。

——ピカッ

という音はもちろんしないけれど、直後にゴロゴロと物々しい音が轟いたのは確かだった。担当アイドルのけんもほろろな態度に、どうしたものかと苦笑していたプロデューサーの顔つきが、すつと変わった。

「……タクシーで行くか。ちよつと並ばなきゃいけないかもしれない

けど」

という妥当な提案に、反論を唱えて別案を出したいと思つてしまつたのは、自分にはかわいげがあるとかないとか、今の今まで考えていたせいなのかもしれない。

そしてそれを勢いのまま実際に口にしてしまったのは、元来のふゆの性格によるところが大きかった。

「……………ら、……………いい」

ただ、それを言うにあたつて、精神力はごりごりと削られ、心音は高まり、謎の赤面症にも襲われるし、声も虫の羽音レベルになつちやつたけれど。

「え？ どうした冬優子」

「だから、その……」

「ん？」

じいっと、ふゆの顔に穴があくんじゃないかってほど見つめられている。口がもごもごとまごついて、思うように動いてくれない。視点も定まらないし、もちろん目なんて合わせてられない。かつかと燃えるような体感温度のせいで、いつのまにか背中にいやな汗がぷつぷつと湧いてきていた。

「かつ、」

ようやく、二の句を継げたはずだったのに、愚かにも盛大に嚙んでしまった。身体中をめぐる血流が湯気をのぼらせる。頭の中は湯あたり寸前。ぼうつとして、ぐるぐるしてきた。

「か？」

なんだかばやけてきた視界の中、目の前で首をかしげる男から逃げるように目線をそらしたその先に、

「傘！」

勢いよく指をさして、今度こそ告げる。

「傘があるんだから、歩いていけばいいじゃない！」

言えた。やつと言えた。

パアツと世界が明るくひらけて見える。

いまだに顔は火が出るほどに熱い。そのおかげなのか、湿度が高く



生ぬるいはずの風が涼しく感じる。ほんのりとひややかな清涼感によつて、瞬間的に火照つた身体が徐々に冷まされていくのが、体感でわかつた。

「……落ち着け冬優子。傘は一つしかないんだぞ。どうやって俺たちは事務所まで歩けると言うんだ」

訂正。頭が沸騰した。

「はあ!? あんたさあ、わかんないの?」

「え?」

「ふゆは、ふゆはねえ! 恥をしのんで! 恥をかく覚悟で! 提案したつてのに、それをあんたは! あんたは……」

「……?」

まだ要領を得ていないらしい思案顔が、ゆるつと数ミリ傾いた。

「はあ……」

まったくもう、馬鹿らしくなってきた。

「それ、よこしなさい」

「えつ、ちよつ」

有無を言わせるまえに傘をぶんどつて、変なところで察しが良くて変なところで察しの悪い変人に、背を向ける。

「おい冬優子どこ行こうとしてるんだ。まだ雨は止んでないぞ」

心の中で、ため息をひとつ。

「わかつてるわよ。わかつてるから、傘を持つてるんでしょ」

「持つてるもなにも、それ、俺のつていうか……まさか、冬優子だけ傘の庇護下に入って、その隣で俺は濡れ鼠になりながら歩けと……?」

まあ別に冬優子が濡れないならそれはそれで、とかなんとかアホなことぬかすアホがアホすぎてアホらしくなってきた。ていうか隣で歩くという発想があつて、なぜふゆの求める正解までたどり着けないのか。

「あーもういい、わかんないならわかんないままでいいから。ここでこのままこうしても時間の無駄でしかないわ。行くわよ」

「すまん、二分だけ待ってくれ。傘買ってくる」

「はっ」

「いや、俺のぶんの傘」

「……」

「俺のぶんの傘……駅ナカのコンビニで……」

本気で改札方面に逆戻りするそぶりを見せるスーツ男に、まさかとは思うけどある可能性が脳裏をよぎった。

「……あんたさ、もしかして、わかっててやってんの？」

「え？」

「どっちなの？」

「すまん、話が見えない」

「だから……」

「……おう」

「ふゆと相合傘するのが、そんなに嫌なのかって聞いてんの！」

わざわざ相合傘なんて口に出して言うのが恥ずかしくて、声が若干うわずった。周りの目が気になって視線をめぐらせるも、衆目はこちらに集まっていない。

放った声のターゲットは、雷にでも打たれたような顔をしていた。これ知ってる、間抜け面つてやつだ。マジでふゆの意図に気づいてなかったつぽい。察し悪すぎでしょ。

「……ああえ」

ものすごい生返事。

「いやでは、ないぞ」

でも、ふりふりつと二度三度、首を横に振ったから理解はしたらしい。

「ふん、なら行くわよ」

「おう」

そして立ち直りも早い。一瞬は驚いていたようだけど、すぐにいつもの好青年フェイスを作って歩み寄ってきた。

「でも冬優子に傘を持たせるわけにはいかないから、返してくれ」

「ああ、はい」

やっぱいいつ、こういう気づかいはできるんだよねと感心したのも束の間、くるりとコンビニ方面に足を向けやがったので、即座に首

根っこを掴んで強制連行へ踏み切った。

「ぐえっ、苦しい。苦しいから離してくれ冬優子。あとついでに傘を買わせてくれ」

「だめ。無理。不許可の極み」

「うっ……観念するしかないのか。芸能記者のみなさん、後生だから今日だけは見逃してくれよ……」

「もし撮られたところで、行き先はいかがわしきなんてかけらもない事務所でしょ」

「いやでも、撮った写真をもとに、あることないこと書かれちゃうかもしれないし」

「……やっぱあんた、ふゆと一緒に傘に入るのがヤなんでしょ」

「そんなことはない」

「じゃあ、いいわよね」

「……………」

しつこくて無謀な抵抗は、やんだ。

目と鼻の先では、やっぱり雨がしとしとと降り続いている。

こつちの方はまだ、やまなくてもいいかな。

??

雨粒が傘に当たる音が、こんなにも遠くに聞こえるのは初めてだった。

ぽつぽつ、ぽつぽつ。

たしかに聞こえてはいるけれど、意識はとなりを歩くプロデューサーにばかり向いてしまう。

だってしようがないじゃない。

相合傘なんて、人生で初めての経験なんだから。

にしてもムカつく。ふゆは多少なりとも、この距離感に思うところがあるというのに、こいつとききたら平然とした顔で左肩を濡らしている。逆に、ふゆはアスファルトに跳ね返った雨が足元を濡らす程度。歩幅も自然とあっている。

「冬優子のその靴、初めて見た気がするんだが。おニューってやつか」  
「ええ、そうよ。だからなに？」

「似合ってるなって」

「あつそ、当然でしょ」

さりげなくも細やかな気配り。言動の端々から匂ってくる隙のなさを察知するたびに、感謝や感心をするべきなのに理不尽なイラつきを抑えられない。このパンプス履いてきてよかったとかけらでも思ってしまう自分自身にも、ちよつとモヤつとする。

湿度が高く空模様もこんなだから、モヤつきは勝手には晴れてくれない。

濡れた車道を走っていくさまさまな車がふゆたちを追い越すたびに、形容しがたい音と小さな水しぶきを上げる一方で、こちらは特に会話がなかった。まあどうしても話す必要性があるのかと問われると、会話に必要性なんて言葉をあてがうこと自体がナンセンスだから答えようもないんだけど、こうも黙々と歩いてばかりだと、どうしても肩を並べて歩く自分とは違う体温を気にしてしまう。じつと観察はできないけれど、顔をうかがってしまう。相手がいまなにを思っているのか、推察してしまう。そして、やっぱり動揺も興奮もなく素顔のままの表情を見ると、少しばかり腹が立ってしまう。

ふゆよりも高い位置にある横顔は、前ばかりを見ていて、こっちは視線をよこさない。緊張してふゆが見られていないんじゃないかと、ただ単に前に向かって歩いてるから前を向いているだけ。表情が、悠然に物語っていた。

数メートル先の歩行者用信号がチカチカと点滅して、赤に変わる。事務所まではあと少しというところで、ようやく立ち止まることになった。

「……」

「……」

会話はない。かぼそい雨音の独奏に、信号の切り替わりを機に複数のタイヤによる多重奏が覆いかぶさった。

車道を挟んだ向かい側では、赤いランドセルを背負った女の子がひ

とり、赤い傘をさして佇んでいる。都内というか、ここらあたりの地表はアスファルトばかりだ。ふゆの住むあたりはそうでもなかった。小学校のグラウンドはもちろん土だったから、雨上がりに行われる体育の授業では、泥の跳ね返りでハーフパンツや脚が汚れないよう、できるだけ踵を浮かせて歩いたり走ったりしていた。男子は気にせず走り回って、服に茶色の点々模様をあしらっていただけ。

となりを歩く、ふゆより少し年上の男は、どんな子供だったのかな。こいつにだって当然、子供時代があったはず。今のふゆよりも背がちっこくて幼くて、今のこいつみたい不思議な余裕もっていない、ふつうの男の子。そんな男子がこんな男性になるには、どういった訓練や転機があったのか。想像の埒外だった。

信号はまだ、赤。雨の日に見る信号が放つ光は、すこしにじんで見える。意図して数秒の間目をつぶると、まぶたの裏で赤っぽい光がぼやっと浮かんでいて、やがて徐々に薄くなっていく。

目を開けて、特になにを思うでもなく横を見上げた。  
視線が、交錯した。

傘の下で初めて、目が合った。

でもそれは、ほんの一瞬のことで、声を上げる暇も息をする暇もなく、目線は外された。

——気のせいよね。

こいつの横顔が赤く見える。

さつきまでじつと赤信号を見つめ続けていたせいで、たまたまそう見えるのかもしれない。

でも、たしかめたい。

すこしだけ踵を上げて、息が触れる距離に顔を近づけた。

「ど、どうしたんだ」

錯覚だった。

ふゆの勘違いだった。

平然とした顔に、普段通りの顔色が塗られていた。

「どうもしないわよ」  
なぜだろう。

胸がどうしようもなくざわついた。  
つま先に力を込めて、思いつき踵を上げてみた。  
雨の音はもう、聞こえなかった。

(おしまい)

まみみのみみに触れたなら

仕事終わりの摩美々を待たせてしまっていたので、別の現場から超特急で車を飛ばした。

もうとつくに日は沈み、お月様が雲間に紛れる時間帯。摩美々は高校生なんだから、できるだけ早く家に帰しておかなければならない。急がねば。

想定よりも早く待ち合わせ場所に着いたものの、しつかり待たせたことには変わりないので、摩美々は少しばかり不機嫌になっているかもしれない。

ざっと辺りを見回すまでもなく、対象は見つかった。特徴的な紫色のもこもこツーサイドアツプに、後ろから声をかける。

「摩美々」

返事がない。もしや不機嫌度数が上限を突破してしまったのかと思っただが、どうやら違うらしい。純粹に俺の存在に気づいていないようだ。聞こえてもいなかったから、耳にイヤホンでも着けてるのかもな。

本来なら驚かせないためにも、相手の正面に回った上で声をかけるのが思いやりに溢れた模範的行為なのだが、そうしなかったのは普段より受けている些細なイタズラへの意趣返しという側面が多分に含まれていた。

「まーみみ」

声音が不恰好にうわずつた。そのぶん、摩美々の肩に置こうとした手も不自然にうわずつてしまう。よって、触れるはずのなかった部位に触れてしまった。

まとめられた紫色のわたあめの内側で、ひっそりと息をひそめるように隠れていた耳に引っかけた人差し指の腹は、慣性にしたがって耳輪を撫で下ろす。一拍を置いて、肩に手が着地。

「ひっ」

甲高く短い悲鳴が聞こえた気がする。

誰の声だろう。

ああ。

摩美々か。

しかし意識がはつきりしない。

右手、人差し指の先が、燃えるような熱を帯びている。親指とこすり合わせてみても、熱は冷めない。むしろ感触が鮮明に蘇ってくる。

摩美々の右耳。肌とも唇とも違う、柔らかさの中に芯を感じさせる触り心地だった。すべすべしていて、なまあたたくくて、丸みを帯びていて、なぞるだけで、なぞるだけで……なんだろう。

「あの一、プロデューサー……そういうイタズラは感心しないんですケドー」

目の前で摩美々が、むくれた顔で不満を唱えている。

「ああ……」

「わかってるんですかー?」

「ああ、わかってるよ。悪かった。今度からはちゃんと前から声をかけるよ」

「ならいいですケド」

会話を重ねるにつれて、感覚が正常に戻っていく。ということは一さつきまでの俺は、正気ではなかったのだろうか。わからない。

もう一度、摩美々の耳に触れてしまったらならば、俺は一体全体どうなってしまうのだろうか。

知りたいような、知りたくないような気がした。

車に向かう途中、摩美々はしきりに紫色のもふもふを触っていた。両側でなく、右側ばかりを。

もしかして、摩美々が気にしているのは髪ではなくて……。

夜の闇の中では、髪の間からチラリと覗く楕円の色づきは判別できない。

でも、どうしてだろう。

冷めきったはずの熱が、右手の人差し指にぼうっと灯っていた。



翌日。

「あつ、すみません。右手が滑っちゃいましたあ」

「……………」

「今度は左手があゝ」

「くっ……………」

「とどめはこれに決めましたゝ」

「やめて……………もう、やめてくれ……………」

「ふうゝゝ」

「ああああああああ」

あの手この手で両耳をいじられる俺の姿が、あつたとかなかったとか。

摩美々ツッ！ 次は俺のターンだからなツツ!! 覚悟しておけよツツツ!!!

(おしまい)

## 誕生日なのに縛られてしまった黛冬優子を祝う会

「なんだこれは」

他社での打ち合わせを済ませ、事務所に戻ってきたプロデューサーが目にしたのは、黒いアイマスクで視界をふさがれて、手足も縛られ、おまけにボールギャグを噛まされて身動きも物言いも許されず、もがもがともがく黛冬優子の姿だった。せめてもの救いは、床に転がされず、パイプ椅子に座らせられているところか。ただ、その椅子も冬優子の動きによりガタガタと硬質な音を立てており、かえってプロデューサーに物々しい雰囲気を与える要因になっていた。

「これは……いったいなんのつもりだ。なあ、あさひ」

酷い仕打ちを受けている冬優子の傍ら、ぼけっと突っ立っているアイドルの姿がひとつ。芹沢あさひ。日頃から冬優子に最も世話になっていくアイドルであり、感謝こそすれど、こんな状態の彼女を放っておくなんて所業は許されなはずだ。あさひの瞳は無機質な宝石のごとく透けて輝いているが、いつものように何を考えているのかは不透明だった。

「こうすれば、喜ぶと思っただんす」

「喜ぶ？ 誰が？」

「もちろん、冬優子ちゃんっす」

「……そうか」

とりあえず返答をしながらも、プロデューサーの脳裏は疑問で満ちていた。

（拘束されて冬優子が喜ぶだって？ なんの冗談だそれは。もし本当に嬉々として縛られたのなら、冬優子とはんだDM人間ってことになるわけだが、おそらくその可能性はない。なぜなら、当の本人は、今こうして身をよじり抵抗の意を示している。きつと、あさひの早とちりや思考の異次元的飛躍があったせいで、こんな事態に陥ったんだな）

どんな理由があろうが、女の子が縛られているのを黙って見ている

のは良心が痛む。プロデューサーは、冬優子とあさひに歩み寄った。「とりあえずは……あさひ、冬優子の拘束を解くが、構わないよな」「あ、だめっす」

思いのほか真剣味を帯びた声に咎められて、プロデューサーはたたらを踏んだ。次いであさひによつて告げられた内容に、彼は驚きのあまりポカンと口を開く。よほど意表を突かれたらしい。しかしすぐに彼は、心の中の葛藤を押し殺すように唇を引き結ぶと、力強く頷いた。

「わかった。あさひに従うよ。それで、俺はどうすればいいんだ？」

♡

ふゆが馬鹿だった。

あの何考えてんだかわかんない馬鹿あさひも馬鹿だけど、ふゆはもつと馬鹿。

どうして、のこのことあさひに言われるがままに、不自然に用意されていたパイプ椅子に座って、両手を差し出してしまったのよ。

部屋の中にふゆとあさひだけじゃなく、摩美々ちゃんと灯織ちゃんがいいたから油断していたわ。他人の目があれば、そう酷い目には合わないだろうって。まあ他ユニットの子がいいたから、なりふり構わず抵抗ができなかったわけだけど。

その結果が、これよ。

視界は真つ暗。身動きは取れず、耳栓をはめられているから、音も聞こえない。感じるのは人の気配と、いろんな物が混じったかすかな匂いだけ。あろうことか口にもなにか着けられてるみたいで、喋れないしシンプルにキツイ。

ていうかなんで、摩美々ちゃんも灯織ちゃんも止めてくれなかったの。耳栓を入れられる直前、手足を縛られながらパニックってる最中に「本当にこんなことをしていいんでしょうか？」って灯織ちゃんの不安げな声と、「まあ、なるようになるでしょー」って間延びした摩美々ちゃんの声は聞こえていたから、まるつきりふゆの惨状を無視してい

たはずではないと思う。だからこそ、未だに縛られている理由がわからなかった。普通、止めるでしょ。人が、人を拘束してるのよ。サイコパスかあんたらは。

そして元凶はもつと何を考えているのか不明なのよね。

今のところ移動も、命令も、なにもない。

ただ、じつとさせられているだけ。

あの子のことだから、なにしでかすか予測できなくて怖い。痛いのは嫌よ。やっぱびっくりするのも嫌だし、つーかこの状況がまず嫌。ほどけ、さつさとほどきなさいよ馬鹿あさひ。

「——ッ」

他ユニットの子たちがいる可能性も踏まえて、『ほどいて、あさひちゃん』と言ったつもりだった。でも忘れていた。口に何かを噛まされているから、意味のある言葉は喋れない。

「……」

もう、どうしろっていうのよ。

拘束が解かれるまで、このまま待つてろというの？

絶対、ヤなんだけど。

トイレ行きたくなくなったら困るしヤバイし大惨事だし。

放せ！ 放して！ 放しなさいよ！

怒りを込めて、身をよじる。けど、お腹と太ももあたりを椅子とくくりつけられていて、両足も動かせないから、下手に動くとも横転してしまう恐れが。椅子と一緒に地べたに這いつくばったまま、暗闇の中で過ごすのは今よりもつと嫌だ。でも、このままなのも嫌だ。

というわけで叫んだ。「——ッ!!」って、思い切り。言葉にならないう声だけど、意思くらいは感じてくれるでしょ。あと単にうるさいだろうし。

——ひっ!!??

右耳が、人の手にさわられた。背中の中から、ぞわぞわと粟立つ波がのぼってきて、思わず体が震える。

なに？ なんなの？

身構えていると、今度は左耳にも似たような感覚。ぞわぞわぞわぞ

わ。鳥肌が立ちそう。気持ちいいのか気持ち悪いのかわかんないけど、とにかく気味が悪い。

ゴソゴソと大きな音が、耳栓を通じて脳へダイレクトに響く。ふゆの耳がというより、耳栓が触られている……？ あっ、これってもしかして……と予感した瞬間、聴力が復帰した。

耳栓が外されたみたい。

ようやく外の状況が少しでも知れる。わずかに安堵したのも束の間、憎きヤツの呑気な声が聞こえた。

「冬優子ちゃん、大丈夫ですか？」

「あいおういやあいあお」

大丈夫じゃないわよ。そう言ったふゆの肉声は、意味なき音に変換された。腹立つわね。

「あっはは、冬優子ちゃん、なに言ってるのか全然わからないっす」「ウーッ！」

こいつ腹立つ!!？ 誰のせいであんななってるのか分かってんの？ あっ、そういやこの部屋、あさひ以外にも誰かいるかもしれないんだ。摩美々ちゃんと灯織ちゃんは言わずもがな、他に誰か入ってきていてもおかしくない。誰か入ってきてるなら、その誰かさんはいち早くふゆを解放してほしいんだけどね。

「あ、安心していいっすよ。いまこの部屋にはわたしたち以外、誰もいないっすから」

「……」

そのどこに安心できる要素があるのよ、というツツコミはさておき……そう、誰もいないのね。誰もいない。……誰もいない？ ええ……あの二人、ふゆのこの状況を把握していながら、部屋を出て行っただってワケ？ ええ……さすがに、ちよつとソレは……ええ……？ いたずら好きの摩美々ちゃんはまだしも、あの真面目が服を着て歩いているような灯織ちゃんすらも……どうしたっていうのよ……。

「たぶんそろそろプロデューサーさんが帰ってくるから、それまで冬優子ちゃんは待ってて欲しいっす」

ズボッ。

前触れがなかったから驚いたけど、どうやらまた耳栓を両耳に入れたっぽい。

……ん？

いや違う。

なんだかさつきとは、耳の穴に触れる温度が違う。少し冷たい。ただ、すごくしつくりきている。

——テテテテテテテテ♪

「っ!?」

大音量が、鼓膜を殴ってきた。心臓が大きく跳ねて、一瞬、頭が真っ白になったけど、徐々に意識は回復。

——テテテテテテテテ♪

それと同時に、耳に差し込まれたイヤホンから流れる音楽に、どこか懐かしさを感じ始めた。なーんか、聴いたことあるというか、最近もどこかで聴いたようなテンポ感というか、いつもこの寒い時期に入ると聴いているような雰囲気というか……

流れ始めてからおよそ二十秒が経って、あ、歌い出すわねと直感したふゆの感性は間違っておらず、男性の歌声が現れた。もちろん依然、爆音で。

——ラアストクリスマス、アゲイビユマイハア♪

そうそう、この曲この曲。名曲よね。クリスマスシーズンの定番。ラストクリスマス。確か、ワム！ってどっか外国のグループの。

あと二十日も経てば、その日なのよね……。今年は仕事入ったはずだし、家族でクリスマスってわけにはいかないだろうけど……。つてしみじみしてる場合じゃないわ。なにこれ、耳栓代わりのつもり？  
にしてはうるさすぎるし、頭が痛くなりそう。

——フフフフフン、フフフフン♪

つて、あれ？ 鼻歌？

なにこれ、こんな歌だっけ。違うわよね。ていうか歌声も違う気がする。素人みが強い。一般人のカラオケ並みか、あるいはさらに気が抜けている。それこそ鼻歌みたい。

——フフフフン、フフフフフン♪

これまんま素人の鼻歌じゃない。なんなのこれ。

——まくだく、越えられなア〜い、キミはいまでもスペシヤル♪  
いやなんでここだけエグザイル版なのよ。

しかもサビを歌いきったところで、急に音楽止まったし。ぶつ切り感、満載。……まったく。

なによこれ。

——テテテテテテテテ♪

また!?

またイントロから流れんの!?

——テテテテテテテ♪

なにが悲しくて、知らない男の歌声を二度も聴かなきゃならんよ。

——ラアストクリスマス、アゲイビユマイハア♪

案の定、失望は裏切られなかった。さつきと全く同じ、微妙なハーモニーが右耳から左耳から注ぎ込まれる。耳栓突っ込まれて無音で過ごすよりは幾分かマシだけど、マシっただけで辛くないわけではない。いったいいつまでこの謎曲を聴かせられるのか。

だいたい、なんで耳を塞がれてんの。聞かれてはまずいことでも、いま部屋の中でやってんの？ でも部屋にはふゆとあさひしかいな  
いみたいだし。もう、なんもわかんないわね。  
ズボツ。

両耳に開放感が訪れた。

「どうっすか？ プロデューサーさんの歌声は」

「モガッ？」

は？ プロデューサー？

プロデューサーの歌声ですって？

「今の曲、こないだ仕事中に口ずさんでたプロデューサーさんの歌声を使っつて、合成したものなんすよ」

言われてみると確かに、あいつの声によく似ていたような気がする。もう一回聴かなきゃ確証は持てないけど。ていうかなにげに中々の技術力ね。誰が合成なんて手の込んだことやったのかしら。

それ以前に、まずなんであいつの歌声を録音しようって発想に至ったのよ。

「冬優子ちゃんが喜ぶと思って録ってみたんすけど、どうっすかね？  
なんて聞いても、今の冬優子ちゃんには答えられないっすけどね、  
あはは」

あはは、じゃないわよ。

なにが面白いの。

しかもあいつの歌声で喜ぶなんて子、いるわけないでしょ。歌、そんな上手くなかったし。もちろん、ふゆも聴かされて別に嬉しくなんてなかった。もう一度できるだけ入念に聴いて、どこがどう下手くそなのか分析くらいはしてやってもいいけど。

ズボツ。

またなんかはめられた。

感触的には、先程と同じイヤホンっばい。

ということはつまり、

——テテテテテテテテ♪

うんうん、そうそう、これこれ……………じゃないわよ！

なにが悲しくて、あいつの歌声をエンドレスリピートしなきゃならないの？

♡

あー、もう……………うんざりよ。

正直に言うわ。

たしかにあいつの歌声なら聴いてみたいって思いが、ふゆの中でなかったとは断言できない。

でもね、だからといって。

同じフレーズ、同じ音程、同じ発声の曲を何度も聴いてれば当然、飽きるし退屈だし苦痛なの。音楽に限らず、どれほどすぐれた対象でも延々と摂取していれば、いつかは飽きがくる。いや俺は私は違う、好きなものだったら無限に浴びられるって人も中に入るかもしれない。



でもふゆには無理。

——テテテテテテテテテテ♫

ねえ、腐るほど聴いたイントロがまたもや流れ出したわよ。

曲自体に罪はないのに、今後、この曲を街中で聴くたびに、今回の件を思い出して気が滅入ってしまいそう。

——まくだく、越えられないア〜い、キミはいまでもスペシャル♫  
はいはいスペシャルスペシャル。

どんだけふゆが特別な存在なのよ。ヴェルターズオリジナルかつての。

——テテテテテテテテテテ♫

体感で何百回目かのイントロが流れ出した直後、

「っ!?」

新たな人の気配を察した。

視界は閉ざされているから、もちろん誰かはわからない。ただ、少なくとも現状は打開できるはず。

というわけで、横転事故を起こさない程度に身体をよじって椅子を揺らす。声は上げなかった。きつとみつともないうめき声しか出せないだろうし、それを他のアイドルやプロデューサーに聞かせるのは抵抗があった。

縛られているだけなの？ 縛られているから？

とにかく疲れる。精神的にも、体力的にも。動かずじつとしていれば、体力ゲージは減らないと分かっている。しかしチャンスがあれば手を伸ばしてしまうのは人間のサガってもの。

アイマスクの外で何が繰り広げられているのか判然としないけど、動かずにはいられなかった。

……けど、ふゆの願いも叶わず、一向に進展はない。

なんなのよ。

入室してきたどなたかも、あきひとグルってわけ？ それともふゆの哀れな姿を目の当たりにして、いい気味だなどとも思ってたのかしら。その疑念はすぐに晴れる。ふゆの目から見て、この事務所に、そんな性根の腐った子はいないと踏んでいるから。ふゆ以外には。

それで曲がうるさい。

ずーっと流れてるもんだからそのうち慣れるかと楽観してたのが甘かった。ぜんぜん慣れないし、うるさいものはうるさい。

さっさと外しなさいよ、馬鹿あさひ。

スポツ。

あ、外れた。なんか外し方が、前の二回よりすこし優しいような気がした。

「冬優子、大丈夫か？」

予想以上に至近距離からぶつけられた声に、驚いた。しかもそれが予想外の人物によるもので、さらに驚いた。

待ちに待つ……ってないプロデューサーだ。

「ムーツー！」

別にムー大陸がどうのと訴えたわけじゃない。あんたそこに居るんなら、喋りかけてないでさっさとふゆを助けなさいよ！と言外に伝えたつもりだ。

ところがどっこい。耳元の気配は、離れようとしなない。

「その態勢は辛いと思うし、一刻も早く解放してほしい気持ちも痛いほどわかるんだが、もう少しだけ待ってくれないか。悪いようにはしないから」

「——っ」

悪いようにはしないって、もうこの時点で悪いんだけど？ なにいつてんのこいつ。あと耳元で囁くの早くやめてほしい。息がかかったり音の振動に耳がやられてんのか、身体の底からなんか湧き上がる感覚がするのよ。すんごい、こそばゆい。不覚にも声が漏れそうになる。なにこれ。

「本当にすまない、冬優子」

「ツー！」

やばい。ハ行は特にやばい。発音されるだけで、息が耳にかかってくる。

「冬優子？」

「……っ」

「冬優子、大丈夫か？」

「——ッ」

ぞくぞくぞくぞく。全身の皮膚という皮膚どころか、皮膚の裏側にすら鳥肌がスタンディングオベーション。そんなの錯覚だつてわかつてる。でもそれくらい、奇妙で、どこか心地いいような、いやこいつの声聞いて心地いいとか認めるのもなんかやなんだけど、

「冬優子？」

「——んっ!?？」

あーもうッ！ 耳元で喋んな!!

「すまん、こんな近くで喋られて良い気はしないよな。ただ、どうしてもってあさひが言うから」

……は？

「そうなんすよ。プロデューサーさんにそうしてもらった方が、冬優子ちゃんが喜ぶと思って」

……ハア???

なにいつてんのあの子???

「もつと冬優子ちゃんに喜んでもらうために、準備ができるまで、プロデューサーさんには頑張ってもらおうっすからね」

「ちよっ、あさひちゃん、それ言っちゃまずいって〜」

え？ 愛依？ 愛依の声よね今の。それに二人の会話……なにか準備でもしてんのかしら。考えられる可能性としては——

「あー、それでな、冬優子」

「っ！」

もうッ!!?!!?

せっかく考え事しようとしてんのに、あんたが耳元で声出すものだから全然集中できないじゃない！ なんなのよ！ 喋るなら喋るで、もつとはつきり言いなさいよ！ もしくは本気で囁くか、どちらかにしなさい……いやダメよ、そんなのダメ。まず、ふゆの耳をいじめないでほしい。ダメになる。

「冬優子、聞いてくれるか」

あ〜〜、もう………

ダメになるって言ってるのに。

「こんな状況で言うことでもないと思うんだが」

しかもこいつの声音、こんな時に限って過去一、二を争うくらいに真剣味を帯びているし。なんなのよ、なに言おうとしてんのよ。

「冬優子はよくやってくれてると思う」

「……」

「仕事にもレッスンにも熱心で、仕事相手やユニットメンバーのみならず、その場にいる人への気配りを忘れない」

「……」

急に褒められたんだけど。

「いつもいつも、本当に良くやってくれてる。一度は、そうだな……」  
声のトーンが落ちた。次にどんな内容が告げられるのか、頭は理解していた。

「くじけてしまったこともあったかもしれない。でも、あの時だって、俺はきつと冬優子が戻ってくるって信じてた」

「……」

思い出す。

ふゆが無責任にすべてを投げ出して、本心をさらけ出してしまった時の、プロデューサーの顔を。

結局諦めきれなくて事務所に戻ってきたふゆを見て、ほころんだプロデューサーの顔を。

もう一度、アイドルをやりたい。そう告げたふゆを、迷わず迎え入れてくれたあいつの顔を。

「初めて会った時から、感じてたんだ。この子は必ず、すごいアイドルになるって」

そんなわけない。あの頃のふゆには、なんにもなくて、なんにもないのに自分から変わろうとはしていなくて。

「冬優子はそんなわけないって思うだろうけど、俺はそうは思わなかったんだ。あの時の冬優子の目を見たら、わかったよ。この子なら絶対にやれるって。トップを目指せるって。上手く言えないけど、力があった。何者かになりたいって、強く願う力が。だから引き寄せら

れたんだろうな。偶然にも俺の仕事は、冬優子みたいに何かになりた  
いと願う子と一緒に頑張ることだったから」

「……」

願いを叶えてやるのが俺の仕事だって言わないのが、こいつらし  
い。一緒に頑張ることって、なによ。まったく。子どもじゃ、ないん  
だから。なによ、もう。

「だからな、冬優子」

――。

「出会ってくれて、ありがとう」

ああ、だめだ。

「生まれてきてくれて、ありがとう」

だからダメだって言ったのに。

「そして……」

こんなクサイことばつか言われたら、誰だって――

「誕生日おめでとう、冬優子」

………え？

一気に身体が軽くなった。

パパパパパパアン！

最初、四方八方から銃で撃たれたのかと思った。

けど違う。

すごい量のひらひらが、ふゆにまとわりついてる。

『冬優子ちゃん、誕生日おめでとう〜!!!』

「え？ ……え？ ……あれ？」

いつのまにか喋れるようになってる。

視界も開けている。

じゃなくて、あれ？

なに？

すごい人数の、肉声が聞こえたわよ。

というか、なんて？

誕生日？

は？

……は？

「……………は？」

「あれ、冬優子ちゃん……びっくりしすぎて、おかしくなっちゃったっすか？」

「てか冬優子ちゃん、なんか泣いてる感じじゃない？ だいじよぶ？」

「なっ、泣いてなんかないから！ これは……そう！ 汗だから！」

あいつのせいでちよつと泣いちゃったとか死んでも認めない。

あさひと愛依から話しかけられたおかげで、ほんの少し冷静になれた。

いまさっきの口調、みんなに見せてるふゆからは少し崩れちゃったけど、問題ないわよね？ 大声じゃなかったし、そこまで聞かれてまずい発言じゃなかったし。

「……………あ」

それよりも。

「……………みんな」

みんながいた。事務所のみんな。どのユニットも、どのメンバーも、はづきさんだつて社長だつて、そしてもちろん、あさひや愛依、あいつだつて。

ふゆのために。

ふゆのためだけに。

集まって、笑ってくれている。

「……………ありがとう」

か細く、可愛くもない声が無意識のうちにこぼれていた。みんなにはきつと聞こえていないからもう一度、今度は底抜けに明るく、世界でいちばん愛らしい声で。

「みなさん、ふゆのために、今日は本当にありがとうございます！」

涙に濡れた口角も、しっかり上げた。

「ふゆ、とつても嬉しいです！」

\*

「あさひ、愛依、そこに正座」

「え〜」

「ちよつ冬優子ちゃん、それはちよつと」

「えーじゃない文句も言わない、いいから正座！ わかってんのよ、首謀者はあんたら二人だって」

「む、だったらなおさら怒られる意味がわかんないっす」

「あんたねえ……いくらサプライズにしても、何も言われず急に長時間縛られて、怒らない人なんているわけないでしょうが！」

「わたしは怒らないっすけど」

「ふゆは怒ってるの！」

「あく、あさひちゃん、ここは冬優子ちゃんの言う通りにしといた方がいいって」

「納得がいかないっす」

「あさひちゃんマジで頼むから、ね？」

「……むー、わかったっす」

「なんでふゆが言っても聞かないのに、愛依が言った途端、正座すんのよあんた。……それと、ここで見てるプロデューサー。そう、あんたよあんた。あんたも……まあ、正座しろとまでは言わないけど、ほぼ同罪だからね。縛られてるふゆを、放置したんだから。あまつさえあんなこと急に言ってきた——」

「冬優子ちゃん泣いてたっすもんね」

「泣いてない！」

「プロデューサー、どんなこと言って冬優子ちゃん泣かせたワケ？」

「泣いてないって言ってんでしようが！ あくもう、あんたもニヤニヤこっち見てる暇があるんなら、ふゆのために無駄に高い茶葉でも買ってきなさいよ！ 甘さ控えめのケーキによく合うやつね！ わかった？？」

（おしまい）